

結城友奈は勇者である
の世界に転生したらま
さかの敵ポジション
だった！？

中野☒sソックス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある不幸な事故で死んでしまった主人公、佐藤雄一は転生するときになんと性転換して転生したらしい。

佐藤雄一改め、青木琴晴になった主人公は結城友奈の世界でまさかのバーテックス側という、そんなの関係ねえ！俺はこの世界で生きて行くぞ！という物語です。

基本は原作、漫画、アニメの内容を掻い摘んで書いて、そこにオリジナルな設定やらなんやらを入れた感じのお話です。

作者はこれが初めての作品です。至らない点があると思いますが、どうかよろしくお願ひします。

目次

花結いの章

花結い壺ノ儀

邂逅

1

鷺尾須美の章

プロローグ　　始まりの儀

17

壺ノ儀　　ゝてんせいゝ

34

式ノ儀　　ゝであいゝ

46

参ノ儀　　ゝあおきこはるゝ

62

肆ノ儀　　ゝかいきゝ

93

伍ノ儀　　ゝとつくんゝ

113

陸ノ儀　　ゝてつだいゝ

130

漆ノ儀　　ゝせいしんゝ

151

捌ノ儀　　ゝがつしゆくゝ

167

花結いの章

花結い壺ノ儀

邂逅

琴晴 「どうしてこうなった……………」

と琴晴は悩んでいた。何故なら、勇者としてのお役目は神世紀301年の春に終わりを告げていた。もう此処には来ることは無い……………そう考えてた矢先にまた樹海に飛ばされたのである。

琴晴 「雰囲気でわかる、私達がいた場所と別の樹海だ」

??? 「そうなの？」

琴晴「うん」

そして私の隣には、一緒に飛ばされてきた銀がいる。

銀「ん、そっか……まあとりあえず他のみんなを探さない？考えるのはその後の方がいいかも」

琴晴「そうだね……と言っても何処に行けばいいのだろうか……」

銀「う、ん……！もしかしたらアプリの地図の機能でどうにかなるかも」

琴晴「それだ！」

と琴晴は言い、2人はポケットからスマホを取り出しアプリを起動させた。

銀「え、と……あれ？それっぽいの見つけたけれど……」

琴晴「うん……これは……」

と2人が見ているアプリには勇者達と思われるアイコンの前に敵と思われるアイコンが点々と出たり消えたりしていた。

銀「バーテックスと戦っているのかな？……全く勇者使いが荒いよ。少しは休ませろってんだ！」

琴晴「まあまあ……、とりあえず皆と早く合流しよう、行こう！銀」

銀「了解！」

と二人は足早に勇者に変身しつつ、他の勇者達の元へと向かった。

琴晴「お！みんながいた……えくと……」

と勇者達を見つけた二人であつたが、

銀「目の前のやつは一体……なんか気のせいかオーラが出ているような？」
目の前にこれでもかかとオーラを纏っているバーテックスがいた。

琴晴「うくん……とりあえず一回全力で殴つて見る？」

銀「……そうしようか、合わせていくよ！」

琴晴「いいよ！」

と二人は他の勇者達の上を超えて行き、前のバーテックスに向かつて……

二人「はああああ!!」

それぞれの得物を敵に叩き込んだ。そして、

琴晴「……あれ？倒しちやつた？」

銀「うっそだ、そんなわけ……本当だ」

呆気なく、バーテックスは御霊を壊した時と同じように砂になって消えてった。

銀「もしかしたら、防御力が弱かったのかな？」

琴晴「うーん……ま、まあ早く終わったし……よしとしよう、うん」

銀「え……それでいいの……？」

と怪訝な顔をしていた銀であった。すると……

???「おいそこのお二人さん？」

二人「ん？」

と振り向いた先には、黄色い勇者服を身につけていて大剣を持っている、見たことのある勇者がいた。

銀「あつ、風先輩！」

風「ええ？なんでアタシの名前を……？」

琴晴「あらら？」

と話が噛み合わず困惑していると、後ろから続々と勇者達が集まってきた。

???「おお！新しい勇者さんだ！」

「！……まさかそんなことがあるわけが……」

「あれ？なんか私と似てる人が居るような……？」

「本当だ！あの人銀と少し似ているぞ！」

と三者三様な捉え方を向こうの勇者達が行なっている間に

琴晴「銀！ちよつと……」

銀「ん？どしたの？」

と銀を近くに呼び寄せて密かに話し始めた。

琴晴「とりあえずなのだけれど、私達の世界の話はあまりしない方がいいかもしれない

い」

銀「なんで？別に話をしてもいいんじゃない……」

琴晴「多分だけれど、今の風先輩の反応を見る限り私達の知っている先輩ではないと

思うの。」

銀「まあ、それは反応で思った。で？……」

琴晴「もしかしたら、別の世界の人達なのかも」

銀「別の世界の人？それって……えーとなんだっけ、ぱ……ぱー、パラソルワールド！」

琴晴「違う違う……パラレルワールドだよ」

銀「そうそう！パラレルワールド……で、それが？」

琴晴「うん。他の人達はもしかしたら、私達の歩んできた物語と違う物語を歩んでき

たのかもしれない、その証拠に……あれ見てみて」

と琴晴が指差した方を見てみると放心している一人の勇者がいた。

「東郷さーん、どうしたのー?」

「……………」

「駄目ね、完全に放心しちやってる」

風「こらー! 戻って来なさい東郷!」

と視線を戻し

琴晴「……………ね? こつちの世界の東郷だったら、あんな事にはならない筈」

銀「なるほど……………それなら納得がいくね、了解!」

???「すまないが、話し合いは終わったか?」

と話が終わると同時に青い勇者服に身を包んでいる勇者が私達に話をかけてきた。

琴晴「ん? ああ……………ごめんなさい、今終わったわ」

???「そうか、それならいいんだ」

琴晴「あつ、そういうえば自己紹介がまだだったね、私は青木琴晴! そしてこつちが

……………」

銀「三ノ輪銀だ! よろしくな」

一瞬、彼女は驚いていたが、すぐに本題へと入っていった。

???「私は乃木若葉という、それでなんだが……………色々と話が聞きたい。一緒に来てもらってもいいか?」

琴晴 「もちろん、こちらも色々聞きたいことがありますので」

銀 「右に同じく!」

若葉 「そうか、では付いて来てくれ……みんな! 帰るぞ!」

他の勇者達 「了解!」

??? (どういこと……? なぜ銀が……帰ったらそのつちと話さないと……)

そんなこんなで勇者達が拠点にしている勇者部に着き、自己紹介と色々な情報交換を行った。こちらがワープされる前のこと、他の人達のワープ前のこと、そして今どのよ
うな状況に陥っているのか、その全てを話した。ただ、少し隠したところもあるので完
全に話したとは言えない。

??? 「……と今はそのような感じです。琴晴さん」

琴晴「ありがとうございます、ひなたさん」

彼女は上里ひなたさん。この勇者達の中で数少ない巫女さんだそうだ。彼女は西暦2018年から来たらしい。

ひなた「いいいえ、戦力が増えてくださってこちらもありがたいので。」

琴晴「そう言ってもらえて嬉しいです、それに……」

とチラリと銀の方を見ると：

球子「おお！これが中学生の銀か！タマよりも随分と大きいじゃないか！」

この方は土居球子さん。この方もどうやら2018年から来た勇者様らしく、大きい銀を見てだいぶはしゃいでいる。

杏「タマつち先輩、ちよつと落ち着いて……」

その球子さんを止めているのが、伊予島杏さん。勇者達の作戦参謀的な感じだとひなたさんから教えてもらった。

千景「……やはり、同じ人が二人いるのは落ち着かないわね」

その隣で呆れているのが、郡千景さん。どうやらゲームが得意らしくこの中で一番強いらしい。そして勇者の中でも戦闘力は上の方らしい。

高嶋「でもさらに賑やかになって楽しい！そうだよねぐんちゃん？」

そんな千景さんに話しかけているのが、高嶋友奈さん。最初、結城さんと似ていて分

からなかったが、よく見たら違う所はあるらしく見分けはつくらしい。

千景「そ、そうね高嶋さん……」

風「しっかし……雰囲気変わるわね」

犬吠埼風さん。神世紀300年の秋にこっちに來たらしい。この勇者部の部長であり、女子力よりもおかん力が強いお方。シスコンでもある。

夏凜「確かに、ここまで変わるものかしら？」

三好夏凜さん。煮干しとサプリが好きな、ツンデレのツインテール。本人曰く完成型勇者らしい。

樹「……ちよつと憧れるな……」

犬吠埼樹さん。風さんの妹。タロットができる、スピリチュアルな女の子。ただ姉のせいで苦労は絶えないという。

風「樹!？」

結城「風先輩落ち着いて〜!」

結城友奈さん。神世紀300年の勇者の中で勇者適性が一番高かった人。勇者部曰くゴツトハンドと言われている。何故そう言われているかは分からない。

雪花「にやはは! やつぱりここ面白いわ! そう思わない棗さん?」

秋原雪花さん。最近呼ばれた勇者で、西暦の北海道の勇者らしい。そしてうどん派で

はなくラーメン派という、珍しい人。勇者の中で数少ない……というか一人だけメガネをつけた勇者。

棗「……そうだな、賑やかでとても面白い……」

古波蔵棗さん。こちらも最近呼ばれた勇者で、沖繩の勇者。沖繩そば派。この人もそのつちに負けない天然らしい。

若葉「……はあ」

そしてこの人が乃木若葉さん。西暦時代のリーダーであり、そのつちの祖先だそう。これに関しては……これでもかと、ひなたさんから聞かされた。そして勇者の中では一番強いらしい。

歌野「銀くんが二人いるのもとてもFunnyだわ！そう思わないみーちゃん？」

白鳥歌野さん。西暦時代の勇者で諏訪の勇者らしい。一人で守り続けていたと話では聞いた。何故か所々で英語を使っている。農業王。

水都「そ、そうだねうたのん……」

藤森水都さん。歌野さんと一緒に諏訪を守っていた巫女さん。勇者部の中では普通な人。……一応褒めているつもり。

他にも東郷美森さんや乃木園子（中）もいるのでけれど……二人で何か話しているみたい。

とそんなことを考えていたら、いつのまにか銀（中）の周りには沢山の人がいた。

銀（小）「おお！遂に大きい私が！」

銀（中）「おお！小さい私がいる！懐かしいな」

須美「銀！ちよつとはしやぎすぎよ！」

銀 s 「大丈夫だつて須美！」

須美「はあ……」

園子（小）「頑張つて、わっしー！」

須美「そのつちも少しは手伝つて！」

園子（小）「それは……少し無理かな？」

須美「はあ……」

とW銀がはしゃいで、須美が苦勞しているのを見て苦笑いする琴晴とひなたであつた。

琴晴「あはは……うちの銀が迷惑を掛けてしまつていてすみません」

ひなた「いえ、いつもこんな感じなので大丈夫ですよ。それよりも……」

とひなたさんが右の方に視線を向けると

園子（中）「ねえ、ちよつといいかな？」

真面目な顔をした園子（中）と東郷がいた。

琴晴「……いいよ、そろそろ来るかな？つて思ってた所だし。少し場所を変えようか……ひなたさんありがとうね」

そうひなたさんにお礼を言って琴晴は二人を連れて別の教室へと向かった。

東郷「……あれはどういうこと？」

琴晴「……」

東郷「どういふことなの!？」

園子（中）「落ち着いて、わっしー」

東郷「……ッ！」

といきなり掴み掛かってきた大きい須美……もとい東郷さんは園子の言葉を聞き、琴晴の服の襟に掴んでいた手を離した。

琴晴「どういふことと言われても……あれが真実だよ」

園子（中）「それは分かるけど……どうやってミノさんを……」

琴晴「それはまあ……少し私が無理をしてね？そんなことを聞いてくるってことは、やはりそつちの銀は……」

東郷「ええ……貴方が、考えている通りよ」

琴晴「……そつか」

琴晴（やっぱり私が居ることによって歴史が変わった……か）

と少し暗い雰囲気になってしまったその時、園子がいきなり頭を下げた。

園子（中）「……ありがとうね琴晴ちゃん」

琴晴「！……いきなり、どうしたの？」

園子（中）「貴方が守ってくれたおかげでミノさんは生きられた……そしてこつちの世界に来て、私達は中学生になったミノさんの姿を見る事ができた……不謹慎かもしれないけど、この世界があつて良かったって思つてる。本当に神様と琴晴ちゃんには頭が上がりたくないよ」

琴晴「そ、それはどうも……なんかこそばゆいな……」

東郷「……私からもありがとう。銀を守ってくれて……本当に……ッ！」

と東郷さんは泣き出してしまった。

琴晴「あらら……泣き出しちゃった……園子さんどうすれば……」

園子（中）「どうしようね〜……ああそれと〜、呼び方はあっちの私に言っていた風に呼んでもらって構わないよ〜」

琴晴「そうなの？なら……そのうち」

園子（中）「はーい！それなら琴晴ちゃんは〜……はるはるで！」

琴晴「やつぱり、そのうちはそのうちなんだね」

そして二人は笑いつつ、泣き出してしまった東郷さんを慰めるために側にいたのだ
た。

東郷「ごめんなさいね、二人とも」

そう言つて謝つてきた東郷さん。

園子（中）「いいんよ〜、辛い時は泣いた方がいいつてよく言われるし〜」

琴晴「そうだね、まあそれはそのうちにも言えるんだけどね」

園子（中）「あはは……そうだね、辛くなったら胸を借りることにするよ」

琴晴「いつでもきて大丈夫だよ、もちろん東郷さんもね」

とドーンと胸を突き出した琴晴

東郷「私はもう大丈夫よ。……さて、そろそろ行きましようかみんなのところへ」

園子（中）「そうだね、よし！それじゃあ二人ともいっくよ」

と駆け出していくそのつち

東郷「そのつち！ちよつと待つて！」

とその後を追いかける東郷さん

琴晴「あはは……こつちでも変わらないんだなあ……」

とその二人を追うように追いかける琴晴。たとえ別の世界の人であっても行動は同じなんだなあ、しみじみ思う琴晴なのであった。

銀（中）「で……そんなことがあったから大きい須美が貼り付けてくる……と」と東郷さんに張り付かれながら言っている銀。

園子（中）「まあ、そんな感じなんよ〜」

琴晴「だから暫くはよろしくね、銀？」

銀（中）「了解……色々話とかは任せてもいい？」

琴晴「そこは任せて、ちよつと頑張つてくる」

と銀にサムズアップをして、これからの事を話し合うみたいなのでそちらに進んでいった。

琴晴「さくてと……また面白くなりそうだ！」

楽しそうな顔をしつつ。

鷺尾須美の章

プロローグ〈始まりの儀〉

・・・「あー、暑いなあ……去年よりも暑くなってるよなあこれ……」

アパートの部屋で寝転んでいた男は誰かに話しかけるがのごとく呟いた。

・・・「これが地球温暖化ってやつかねえ………あーもう喉乾いた!」

そう言つて男は立ち上がり冷蔵庫へと向かった。しかし現実というものはいつも非情なこと……

・・・「………あー! 何にもねえ………どうつすかなあ?」

と男は考える。室内温度約32度ぐらいの部屋で考え続けるが、まあそんな暑つ苦し
いところで頭がまともに働くこともなく頭を搔いた。

この男、名を佐藤さとう雄一ゆういちと言う。年は16で現在高校二年生で一人暮らしをしてい

る。今は高校の夏休みでバイトの休日というのもありぐーたらしていた所であった。この男とにかく！休日に外に出るのを嫌がる。趣味に睡眠と書けるほど寝ることが多く、下手をすれば一日中ずつ……と寝ているということもできてしまう、睡眠が大大大好きな男なのである。

雄一「仕方ねえ、近くの自動販売機で買ってくるしかないかあ」

と服を着て財布を持ち家を出た。外は雲ひとつない晴天で the、夏！という天気であつた。

雄一「あつつい……早く買って家に戻らねば……」

と足早に自動販売機に向かつていった。

雄一「あーもう自販機が遠いわ！」

彼は悪態をつきながら歩いてきた。かれこれ1時間くらいだろうか、近くの自動販売機はこの暑さのせいかわかほとんど売り切れであつた。あつたかいお茶や、コーヒー、そしておしるこなどしか残っていなかった。

雄一「あつたかいお茶やコーヒーはまだしもさ、なんでおしるこがあんだよ……」
ぶつぶつと呟いていた。そんな中ようやく冷たい飲み物売っている自販機を見つけた。

雄一「ようやく見つけた……さてと何があるかな？」

自販機にあつた飲み物は、冷えたおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ、あつたかいおしるこ……

雄一「なあああんでおしるここんなにあるんだよおおお！」

雄一の叫びはこの地域一帯に響き渡つたと誰かが言う……。

雄一はほぼほぼ諦めていた、1時間近く歩き回つてもあつたものは、おしるこ、おしるこ、おしるこ……異常なおしるこ推しであつた。

雄一は諦め、冷えたおしるこを買い飲み干した。

雄一「はあ、どうしてこうなつた……」

そう！この男は少し歩けば何も無いところで転び、その転んだ先に電柱がありそこにぶつけ、さらにその上にいたカラスから例のアレが落とされるくらい運が悪い男なのだ！他にもゲームをやれば相手から理不尽すぎるコンボを毎回決められたり、欲しいアイテムは来なく、最高レアリティのキャラも一年やって1人しか出ないという、悲しく運が無い男なのである！

雄一「流石に……不幸すぎるよなあ……はあ……」
と項垂れつつ家に帰るために帰路についていた。

横断歩道で信号待ちをしているときに雄一は考えていた。

雄一「……なんでこうも運が悪いんだろうなあ……神様の所為だったりしてな……そんな

なわけないか」

といつのまにか信号が変わっており、急いで渡ろうとしたその時……
そこら辺のオツチャン「危ないぞ！ そののにいちやん！」
と叫びが聞こえ右を見たそこには……

……壁があつた

……そしていつのまにか吹き飛ばされていた

雄一「……………えっ？」

それがこの世界での佐藤雄一の最後の言葉であった。

雄一「ん…ん、なんかよく眠れたなあ…つてここどこだ？」

彼が目にした光景は…真っ白！一面真っ白で何にもない空間であった。向こうを見ようにも真っ白過ぎて地面と空との境目が見えないほどである。

雄一「なーんじゃこりや…ていうかなんでここにいるんだ俺…」

と問い掛けても誰も答えるはずはないそう思ってたその時……

・・・・「ここか？ここは言うなれば天国だよ若人」

雄一「ツ!?誰だ!」

といきなり返事が帰って来て驚きつつも警戒する雄一、そして声は続く

・・・・「あー……大丈夫大丈夫何もしないから」

雄一「……………本当に?」

・・・・「本当だって」

雄一「神に誓って?」

・・・・「……………神は自分なんだけれど……………」

雄一「なんだって?」

・・・・「ええと、こつちの話気にしないで」

雄一「お、おう」

・・・・「で?なんだっけ私の正体だっけ?」

と雄一は戸惑いつつもよくわからない生命体?との話を続けた。

雄一「結局お前はなんなんだ?」

・・・・「おつといきなりその質問から?もつと色々話してからd「いいからお前は誰だ

?」おお怖い怖いもつと話したかったんだけどねえ」

そう言いながら謎の生命体は一呼吸入れてから説明を始めた。

「……とりあえず私はそっちの世界で言う神様ってところかな？」

雄一「……………は？」

神様「おいおい聞いてきたのはそっちだろう？何変な声出してるんだい？」

雄一「いやだってお前……………見知らぬところにいると思っただけのまにか変な奴が来た！と思っただけならいきなり神様って言うんだぜ？そりゃあ変な声の一つや二つは出るだろう？」

神様「まあ……………そうなのか？」

雄一「いやそうなると思うぞ」

と神様に突っ込みつつ、どうしてこんなところにいるのかを神様に聞くことにした。

雄一「でだ……………どこだ？」

神様「ん？ここ？亡くなった人が来る……………天国だ、なんとなく想像はついていただろう？」

雄一「あ……………まあなんとなくはわかってたけれど……………」

神様「ん？……………さてはここが本当に天国だとわかって少し混乱してる感じ？」

と神様に言われたことは凶星であった。今までは、何となくここは天国なのではと考えていて、少しだけ違う、もしかしたら病院なのかもしれないと考えていたが、神様の

発言により本当にここが天国なんだなあという確信と、死んじまったんだなあという後悔が頭の中で渦巻いていた。

雄一「まあ……………な……………」

神様「暗いなー、さっきまでの元気はどこいったんだい？せつかく良い話があるんだけれどなあ」

雄一「ん…？なんだ？良い話って」

神様「おつ？少し元気が戻ったかなあ？」

雄一「だから良い話って何だ？」

と声のする方向に詰め寄れているのかわからないが言った。

神様「おお、怖い怖い感情が変わりやすいねえ……………まあいいでしょ、教えてあげましょうその良い話を！」

雄一「つまらんことだったらぶんなg「何と転生できる権利を貴方に差し上げましょう！」何？」

と雄一の話の遮って驚きの発言をした神様に雄一はほとんどと質問をしていく

雄一「どこでもいいのか？」「もちろん！アニメの世界はもちろんオリジナルの異世界にだっていけるよー！」そうか……………」

雄一「転生するときの特典みたいなものって？」「勿論なんでもいいよー！」マジか……………」

雄一「……………少し考えさせてくれ」

神様「いいよ！時間はたっぷりとあるからね」

雄一「サンキュー」

そう言い、雄一は考え始めた……

5時間後

神様「流石に掛かりすぎじゃない!？」

と神様に怒られた、そんなに経ったかなと雄一は思った。

雄一「まあそのおかげで何とか決まったで何処に行くかを」

神様「逆に決まってなかったら怒ってたで……………」

雄一「へいへい」

この時雄一は思った、実は4時間ぐらいずっと寝ていたなんてとても神には言えねえと

神様「で？何処行くの？」

雄一「結城友奈は勇者であるってアニメの世界だ」

神様「へー、マゾかなんか？」

雄一「違うわ、何言ってるんだあんた」

神様「はいはい、で？」

雄一「え？」

神様「え？やないで、その前の鷺尾須美の方はやらんの？」

雄一「あー、そっか………そしたらそっちにするかな、結局繋がってますし」

神様「OK、行く世界は鷺尾須美は勇者である………つと………特典はどうするん？」

雄一「あんまりチート過ぎるんはやだなんで、健康な体と、身体能力を良くしてもらえるとありがたいかなあそれと………」

神様「ん、ええで。それと？」

雄一「お………女の子にして欲しいなーなんて………」

何か空気が固まったかのような雰囲気をかもし出している空間だったとのちの雄一

は語る。

神様「は？……なに……そうゆう趣味が……」

雄一「いや違いますって、ちゃんと訳があるんだって」

神様「なんだよ」

雄一「いや、あのですねその……自分ハーレム系が苦手なんですよ」

神様「へー、男なのにか？珍しいな……で？」

雄一「ハーレムするぐらいだったら女の子なつた方がマシだと思ひまして……」

神様「ジー……」

神様からとてつもなく冷たい目線が浴びせられている気がした

雄一「何ですか」

神様「いや？珍しいなあと思つて」

雄一「そうっすか」「で？名前は？」え？」

神様「いやだから名前だつて名前……まさか決めてない？」

雄一「あははは……」

神様「わかった……代わりにつけてやる」

雄一「有難い！」

神様「ちよつと待つとけ……神様なんだつて思つとるんや……これでいいか」

雄一「神様は神様でしょうよ……………ってかなんか早くないですか？」

神様「まあいいんだよこういうのは」

いいのかそれだと、雄一は思いながら神様から名前を發表されるのを待っていた。

神様「じゃ、發表すつぞお前の新たな名前は……………」

ゴクリと雄一は唾を飲み込んだ。

神様「青木^{あおき} 琴晴^{こはる}だ」

雄一「ん？こはるってどう書くんです？」

神様「木琴とか鉄琴の琴って字に晴れの晴だな、意味としてはしとやかでいつでも前向きに一生懸命であつて欲しい……………ってところだな」

雄一「意外にも考えられていた……………？」

神様「そりやあお前一生使つて行くものだぞ、考えるのは当たり前だろ？」

雄一「なんか保護者みたいやな」

神様「誰が保護者だ」

雄一「お、おう……………まあ、なんとか本当にありがとう」

神様「ん、これが仕事だしね。あと伝え忘れてたんだが……………」

雄一「？」

神様「すまんがお前敵のパーテックスの方の立場になつちまつたw」

雄一「……………急？どゆこと？」

神様「あのねえ、なんかねー勇者の枠に入らないらしいんだわ、こればかりは神樹様次第だからねえ仕方ない仕方ない」

雄一「マジかよ……………」

神様「でも大丈夫、天の神の次ぐらいに偉いっばいしバーテックスどもも操れるみたいだし」

雄一「……………はあ……………不幸だ……………」

神様「まあ、頑張れ！第二の人生だ楽しんでこいよ」

雄一「楽しめるのかなあ……………まあ、世話になった」

神様「おう、いってらっしやい雄一……………いや琴晴！」

そうやって雄一……………いや青木琴晴は新たな世界へと向かって行ったのだった。一途の不安を持って。

神様「さーて、あいつの花はなんじやろうね……………ん？これは……………」

神様は笑いつつ言った

神様「これはあいつにピッタリかもしれないな……………」

神様の手には一つの花が乗せられていた

神様「ハナズオウか」

壺ノ儀　　くてんせい　　く

………神世紀292年5月1日私の物語はここから始まった

転生してこの世界での生活を楽しみにしていた

ここの世界で暮らしている人々との交流それらを楽しみにしていた

………しかし私が来た事でまさかこの世界が*****よりも*****になるなんて

この時の私は思ってもいなかったのだった………

青木琴晴のメモ

神世紀292年5月1日

琴晴「……………どうしてこうなった」

そう呟くのは、転生でこの世界に飛ばされて来た男……………いや女、青木琴晴である。今現在この琴晴が置かれている状況は、そう所謂……………捨て子！というやつだ。

琴晴「なんで転生終わって気付いたらダンボールの中に入れられて捨てられているんだ？何、こつちでも運が悪いとかそういう感じなのか……………」

琴晴は呟きまくる、どうしてこんな状況になってしまったかを考えるために。

琴晴「あれかな、ここから誰か拾ってくれる人が居てその人が青木さんなのかな？そんなご都合主義みたいな事がおきるわk「おう、どうしたんや？」え？」

琴晴は考えている途中に男性の声が聞こえそちらに振り向いた、そこには蛇柄のジャケツトを着て、体にタトウが彫つてあり、眼帯もしており、もうどう考えてもそつちの道の人にしか見えないヤベー奴がいた。

・・・「おう、どうした嬢ちゃんこんなところに一人で」

琴晴「あ、あかんどう考えてもあつちの道の人にしか見えない方が来てしまった……どうすんだこれどうすればいいんだ……」

・・・「あー……あかん怖がらせてしもうた、どうすればええんや？……」

とどちらも悩み込んでしまい、側から見たら異様な光景になってしまった。

琴晴「ああ……変な空気なってしまった……と、とりあえず話しかけなければ……」

と琴晴は今も悩み込んでいるどう見ても〇道の人に意を決して話しかけた。

琴晴「あ、あの……」

・・・「お、おう……怖くないぞ大丈夫大丈夫やからな」

琴晴「あ……あの大丈夫です、少し見た目が怖かっただけで慣れたので大丈夫です……」

・・・「そ、そうか……よかった」

と二人が安心したところで琴晴はおじさんに質問を始めた。

琴晴「おじさんは……誰ですか？」

・・・「ん？ワシか？ワシは……一応堅気……やな、つて言っても子供には分からんわなハハツ」

と苦笑いをしつつ説明してくれた。

琴晴「そ、そうですね……でもおじさんからは悪い人そんな感じはしなないです。」

・・・「そ、そうか？ありがとなあ嬢ちゃん」

とおじさんは照れながら琴晴の頭を撫でた。その男の手はゴツゴツしつつもまるで

……

琴晴（ツ!!）

・・・「ど、どうした？」

いつのまにか琴晴はおじさんの手を振り払っていた。

琴晴「ツ！ごめんなさい！そんなつもりじゃなかったんですけど……」

・・・「……いいんだ大丈夫や」

琴晴「本当にすみません……」

と話が止まってしまい風の音だけが聞こえる状況になってしまった。その状況を壊すかのように男はこう言った。

・・・「嬢ちゃん…あんだ、俺の娘にならんか？」

琴晴「え!!」

・・・「いや、嫌ならべつn「良いんですか!」お、おう」

と琴晴は即答だった、この人についてった方がいいかもしれない、そう考えたからだ。

琴晴「よろしくね！おじさん」

・・・「全く……決断早いなあ、もう少し考えたって良いだろうに……まあそれが、この

子の良い所なのかもしれないな、よろしく嬢ちゃん」

と二人は固い握手を交わした。とここで男から

・・・「そういえば嬢ちゃん名前は？」

琴晴「こはる！琴って字に晴って漢字だったはず・・・」

・・・「こはるか良い名前やなあ」

琴晴「おじさんは？」

・・・「ワシか？ワシはなあ・・・吾郎、青木吾郎や！よろしゅうなあ」

そこからおじさん……………青木吾郎との生活が始まった。吾郎との生活は苦しうはあつたけれど、小学校に入るときは無理をしてランドセルなどの一式を買ってくれた。誕生日も毎日一緒に祝ってくれた。たまーに小さな小刀……………調べて見たらドスつていうらしいのと銃が置いてあつた時はびっくりしたけれど、イネスと一緒に買い物に行ったり、お祭りなんかにも一緒に行ってくれた、料理も最初は上手いかなかったけれど最近は二人とも上手く出来るようになり交代で料理をするようになった、授業参観の時はクラスの人と先生に驚かれてたなあ、色々あつてとても楽しかった……………あの日が

来るまでは。

神世紀298年3月28日

小学五年生の終業式後

琴晴はとても上機嫌な足取りで家に帰っていた。

琴晴「終わった〜終わった〜今日から春休みじゃーい♪」

そうして家に帰ってきた、訪問者に気付かずに。

琴晴「おじさん、ただいま『認めへんぞそんなこと!』…………おじさん?」

いきなり吾郎の怒鳴り声が聞こえ、ビビりつつも琴晴はそろりとリビングに近づき聞き耳をたてた。

吾郎「そんな話認めるわけないやろ!まだ小学生やで!?!なんでそないな年で大赦の役目をやらねばいかんのや!」

琴晴「っ!!」

大赦……その言葉が出たとき琴晴は思い知らされた、ここが本当にあの世界なんだ

と、そう思い知らされた。

・・・「ですから、あの子には素質があるのですよ……勇者になる素質が」

吾郎「そないなもん大人がなっておけばええやろがい！なんでよりもよつてあの子のような子供にやらせるんや！」

・・・「なれるのであればとつくになつております、しかし神樹様は私達のような大人ではなく無垢な子供達を選ぶのです、そこを理解してk『そんなん理解出来る訳ないやろがい!!』……これ以上は神樹様に対する反逆とみなし拘束させて貰いますがよろしいでしょうか？」

吾郎「ああ、やってみい絶体あの子は守つてみせるんや……この命に変えてm「やめてっ！おじさん！」!？」

と話を聞いていた琴晴は飛び出した。これ以上は本当に吾郎が捕まってしまう、そう考えて飛び出したのだった。

吾郎「琴晴……何や聞いてたんか……？」

琴晴「途中からね……おじさんが怒鳴るなんて余程のことだからね……」

そして琴晴は少し考え、

琴晴「……私はこの話受けたいって思ってる」

吾郎「なんでや」

と吾郎は少し怒っている声で琴晴に尋ねた。

琴晴「それは……」

そう言い、大赦の人に目を向けた。

琴晴「もし私が受けたとしてこちらにはどの様なメリットがあるの？大赦の人」

そういいながら大赦の人に威圧した。この威圧、同学年の子が上級生にいじめられているときにやったら、その上級生を気絶できたほどだからなかなかのものだと思う。おじさんにはやめておけて言われてたけれど今は別に良いよね？

大赦の人「っ！」

吾郎「威圧を他の人にやるなって言うとつたやろ」

琴晴「アハハ……ごめんなさい」

大赦の人（本当に小学生かこの子？……）

吾郎「で？メリットは？」

大赦の人「っ！メリットはですね……」

と大赦の人は焦りながらも説明を始めた。

大赦の人「まずは名家と共に名を連なることができ、大赦から多額の支援金、公共交通機関などの無料化、その他にも色々あります……どうでしょうか？」

吾郎は唸りつつも答えた。

吾郎「……確かにええなあ、けれど何でここまでする？何か裏があるんじゃないか？」
大赦の人「……申し訳無いのですが私からは何も……」

吾郎は更に唸った、そして琴晴の方を向き、

吾郎「……どうする琴晴」

吾郎は琴晴に尋ねた。そして琴晴は吾郎の目を見てはつきりと言った。

琴晴「私はやる……！」

吾郎と琴晴は見つめ合い……、吾郎は呆れたかのように言った

吾郎「はー……こうなったら止められせんしもう……まあ、イヤイヤだが認めちゃう……」

大赦の人「ありがとうございます……」

吾郎「だけど完全に認めた訳ではないからな……そこだけはちゃんと肝に銘じとけ！
分かったな？」

大赦の人「わかりました……」

そして大赦の人は帰っていった。

吾郎「全く……後戻りはできんぞ？」

琴晴「わかつてる、吾郎には心配掛けないよう頑張る！」

吾郎「はあ……まあええわ、何なら今日は少し贅沢しよか！琴晴！どこ行きたい？」

琴晴「本当に？やったー！だったら回転寿司がいい！」

吾郎「おー、ええで！どうせ沢山お金入ってくるさかいのおパーツといこか！」

琴晴「わーい！」

と元気よく外に出て行った琴晴を追いかけるように歩き始める吾郎。

吾郎「全く……ここだけ見ればただの子供なんだけれどのお……教育の仕方間違えた

のかのお……」

琴晴「おじさんー！早く早く！」

と前を走る琴晴を見ながら笑いつつも歩くスピードを速める吾郎なのであった。

その夜

吾郎の部屋に琴晴が入ってきた。

琴晴「おじさん？」

吾郎「ん？何や琴晴？」

琴晴「一緒に寝ない？」

吾郎「なんでや？」

琴晴「いいから！」

吾郎「お、おう（なんや？急に）」

そして二人は久しぶりに一緒に布団で寝ることにした。

琴晴「吾郎」「……………」

無言の時間が過ぎていくが、琴晴がその時間を壊すように話し始めた。

琴晴「……………私だって怖かったんだからね…おじさんが居なくなっちゃうと思って

……………」

しばらく無言が続き……………」

吾郎「……………すまん、ワシだって琴晴を失うのが怖かったんや……………」

と吾郎は言った。そしたら、琴晴は勢いよく起き言った。

琴晴「これからは無茶しないこと！いいね？」

少し吾郎は考えて……………」

吾郎「……………わかった、男に二言はないで」

琴晴「それならよし！」

と言ひ琴晴は布団に入った、そして

琴晴「ズー……………」

寝た。

吾郎「全く寝るのが早いのお……………疲れが溜まっていたのかもしれない……………」
と笑いつつも吾郎も布団に入り

吾郎「……………琴晴も無茶しちやいけんぞ……………」

そう言い、琴晴の頭を撫でつつ久しぶりに二人で寝た吾郎と琴晴だった。

式ノ儀くであいく

私はあの頃、敵になるという事をあまり自覚してなかったのだと思う
一緒に戦っていたあの三人と別れる事が彼女達を苦しめることになってしまったの
か

まだ自分は良く知らなかったんだと思う

まさかあの三人と***ことになるなんて

ああ……神様でも神樹様でもどちらでも良い

あの三人と出会った頃に戻るのなら……

青木琴晴のメモ

神世紀298年4月9日

青木家

吾郎「準備できたか？琴晴ー？」

琴晴「今行くー！」

と奥からドタバタと琴晴は出てきた。

吾郎「全く……早く行つとかんといかんつてのに……」

琴晴「ごめんなさい、おじさん……」

そう、今日から琴晴は神樹館小学校に通う事になっていて、早めに学校に着いてなければいけないのだ。

吾郎「はあ……いいからはよ行くで」

琴晴「はーい！」

と二人は車に乗り込み、吾郎の運転で神樹館小学校に向かった。

車の中

琴晴「♪」

吾郎「なんや楽しそうにしてるのお？」

琴晴「そう？」

吾郎「少なくともワシからはそう見えるで」

琴晴「ふふ♪まあ、どんな子が居るんだろうなっは思ってる」

吾郎「ま、ワシはそこに心配はしてないけどなあ」

琴晴「……やっぱりあの事？」

吾郎「……そやな」

琴晴「……大丈夫！仲間だっているし……まあまだ顔も合わせたことないんだけれど

……きつと大丈夫！」

吾郎「とは言ってものお……」「おじさん！」うおっ!?!、いきなり何や危ないやろ？」

いきなり琴晴は大声を出した。そして

琴晴「少しは私を信用して！無茶は絶対しないから！」

吾郎「……せやな、分かった……」

と吾郎は納得した。

琴晴「よし！そうと決まれば早く学校まで行こ……ほらもつとスピード出して！」

吾郎「アホか！そんなことしたら警察の厄介なるわアホ！」

琴晴「アハハ……」

とんやかんや言い争いつつも、30分後二人は神樹館小学校の正門前にいたのだつた。

神樹館小学校正門前

琴晴「わあ！綺麗〜！」

吾郎「本当や、綺麗だのお……」

琴晴 「そしてこの奥にあるのが……神樹館……！」

と琴晴が言っている隣で吾郎は人を探していた。しかし……

吾郎 「……ここで待ち合わせの筈だったんだが……来てないのお……」

琴晴 「おじさん……やっぱり早く来すぎたんじゃん！」

吾郎 「別に早く来た方がええやろ！遅れるよりかはマシじゃ！」

琴晴 「ぐぬぬぬ……」

・・・「あのー……」

と二人が言い争っているところに、割って入る様に声がした。

琴晴 吾郎 「ん？」

・・・「もしかして青木様でしょうか？」

吾郎 「まあ……そうやけど、あんたは……？」

と吾郎が怪訝そうに目の前にいる20歳ぐらいの女性に尋ねた。

・・・「これは失礼致しました……私は大赦から勇者達をサポートする為に派遣された安芸と申します、一応勇者達のクラスの担任もやらせて貰っています……どうぞよろしく願います」

と自己紹介を済ませたところで、吾郎が思い出したかのような顔をした。そうこの女性こそ吾郎が探していた人だったのだ。

吾郎「おお、そうでしたかこれはこれは……ご親切にどうもありがとうございます」
琴晴（ハッ！おじさんが珍しくまともな方になっている！珍しい……）

とまるで心の中を察したのか、まるで（いつもまともじゃ！）と言わんばかりの視線を送ってきた。

安芸「いえいえ、こちらこそ……とこでもしかしてその子が……」

と、安芸さんがこちらを見つつ言った。

吾郎「せや、こいつがワシの娘の青木琴晴……あんたらの言う、勇者つてやつの一人や……つてか挨拶せい」

琴晴「あつそうだった……えーと……あ、青木琴晴です！よろしくお願ひします！」

と焦りつつも安芸さんに挨拶した琴晴なのであった。

安芸「よろしくね、琴晴さん」

琴晴「はい、よろしくお願ひします！」

吾郎「……ではあととはよろしく頼みます」

安芸「分かりました……」

と車まで歩いていき、

吾郎「氣いつけてなー琴晴」

琴晴「わかった、行つてきますおじさん！」

そう言つて吾郎は車に乗り込み帰つていった。

安芸「では、私達も向かうとしましょう」

琴晴「はい！」

そう言い二人は神樹館小学校の校舎へと向かつて歩き始めた。

安芸 琴晴「……………」

無言のまま。

琴晴（うーん……一体どうすれば良いのだろうかこの状況……）

と考えていた時安芸さんの方から話しかけてくれた。

安芸「琴晴さん」

琴晴「は、はい！」

安芸「固くならなくても大丈夫、一つ聞いて見たいことがあるの」

琴晴「……何でしょうか」

安芸「貴女とあの人のとの関係性についてのことなんだけれど」

と言われ少し考えて言った。

琴晴「……それは大赦からの命令でしょうか？」

安芸「いえ、大赦からではなく……私個人として気になって……ね」

琴晴「そうですね……」

と聞きそれなら話しても良いかなと思ひ、

琴晴「なら少しだけ教えてあげます！勿論秘密ですよ？」

そう言い、私が捨て子だったこと、そしておじさんに出会い…拾われたことを話した……無論転生者、と言うことは秘密である。

安芸「そう……ごめんなさいね変な事を思い出させてしまつて」

琴晴「別に大丈夫です！今の私がこうして生きて居られるのもおじさんのお陰だから。おじさんを少しでも楽にさせられるように受けたんです……この、勇者のお役目を」

安芸「……やつぱりこんなことを子供達にやらせるなんて……」

琴晴「安芸さん……？」

何か今安芸さんが言つていた様な……？

安芸「……ごめんなさい何でもないわ……さて、着いたわ」

と安芸さんが指を前に向け、私は考えをやめてその指の方向を見た。そこには神樹館小学校の校舎があつた。

琴晴「これが神樹館……」

安芸「どう感じますか？」

琴晴「何となく不思議な感じがします」

安芸「そう………まあいいわ、そろそろ教室に向かいましょうか」

琴晴「…はい」

そう言い、二人は神樹館の中に入り教室へと向かった。

6年1組の教室前

安芸「私が入ってきなさいと言ったら入ってきて、いい？」

琴晴「分かりました」

そう言い安芸さん……いや安芸先生は中へと入って行つた。

琴晴（……ふう……緊張してきた……中に入ればあの三人が居るのか……ちゃんと話せるかなあ……第一印象が悪くない様にしなければ……どうすれば良いんだろう……うん！考えてても仕方ない！当たって砕けろの精神で行くか」

と考えている内に

安芸先生「入ってきなさい」

と呼ばれたので教室に入つていった。教室に入つたら、外からでは分かりにくかったが意外にも人数が多く少しビックリした。多分四十人くらい居るのかなと思つた。と
その前に自己紹介しないと……

琴晴「わ、私は青木琴晴つていいいます！好きな食べ物はどうぞとご飯で……す、好きな教科は社会です！これから皆さんどうかよろしくお願いいたします！」

……どうだろう緊張しながらだったけれども自分では良い自己紹介だと思う。周りの反応は……うん大丈夫だったみたいだ。

安芸先生「じゃあ、席は乃木さんの後ろね」

琴晴「はい」

そうして自分の席に向かって行つた、その途中色々な人から挨拶されたので勿論返した。挨拶されたら挨拶し返す、そう古事記にも載っている。……多分

そして挨拶した人の中には……

……「よろしくね青木さん」

琴晴「よろしくね」

鷺尾須美、アニメでの主人公であり……少し堅いところもあり涙もろいところがあり決めたら一直線などところがある、しかしそれよりも思った事がある。そう……このメガロポリスと表現する他のない胸だ。アニメで見て居た時も、小学生にしてはでかくないか？と困惑していたが、こう実物を見ると改めて感じる……やはりデカイ、どういう生活を送っていればこうなるのやら……そう感じてしまう程にだ。……あまり見ない様にしないと。

そしてもう一人……

……「よろしくね」

琴晴「よろしくね」

乃木園子、正直言つて何をするのかが分からないつかみ所のない人だが、ここ一番つてところで発揮される閃きや行動力は流石の一言に尽きる。でもやつぱりこの天然な娘は何を考えているのかが全くわからない。しかしそんなホワンホワンしているこの子の家こそが乃木家だ。大赦での発言力が一番強い家でもし私が……いやそれは考えない方がいいかもしれない。

そして鷲尾須美の席から数えて右に二つ進んだところにいる人が、三ノ輪銀。転生してやる事の一つに入っている出来事にこの三ノ輪銀が関わっている。…そうこの三ノ輪銀はアニメの通りに進めば必ず……。そんなことはさせない絶対にだ、でなければ転生した意味がない！そう心の中で私は再び決意した。

そう思いつつ自分の席に座った。そこからは始業式だったり一年の行事の説明だったり教科書を配られたり等何やかんややっていたら放課後になっていた。時間というもののは流れるのが早いなあと考えていた……が！しかしながらここからは気をまた引き締めなければいけない、何が始まるって？転校してきた人が来たらず行われる事が一つある……そうクラスメイトからの質問の嵐だ。あちらこちらから質問が飛んできて気づけば、正午ぐらいで学校は終わってたはずなのに、質問の嵐を答えていたらいつの間にか1時になっていた……いやこう考えたほうがいいだろう一時間で済んで

良かったのかもしれない、うん。

琴晴「……そろそろおじさんも迎えに来るだろうし正門に行こうかな……ん？」

と琴晴の目に飛び込んで来たのは、目の前で爆睡している乃木の姿だった。

園子「スピー……スピー……」

とても気持ち良さそうだ

琴晴「……つじやなくてこれ起こさないと不味いよね……おい乃木さん起きてー」

と乃木さんの体を揺すってみた……しかし起きない、それどころか

園子「スピー……スピー……それは私のだよ……スピー……」

と寝言を言う始末。

琴晴「どうすれば起きるんだ……おいもうみんな帰つてるよ……」

園子「スピー……ハッ！……あれえ？夢だったのかな」

と体を揺すっていたらようやく起きた。

琴晴「おはよう、乃木さん」

園子「ううん……？あ〜！転校生の……なんだっけなく？ええと〜うんと〜」

琴晴「琴晴、青木琴晴って言うの……朝も挨拶した様な気がするけれど？よろしくね」

園子「うん、よろしく、あと起こしてくれてありがとうね〜」

琴晴「いいのいいの、それよりも時間とかって大丈夫？もう1時だけでも」

園子「んく……あわわわ急いで帰らないとく……ありがとうねく、はるはるく」

そう言いカバンを持って教室から出て行った園子なのであった。

琴晴「……はあ、帰ろうか」

そう言つて琴晴もカバンを持ち教室を出て行つた。ん？　そういえば、はるはる……？

琴晴「あはは……あの一瞬で考えつくのか……とんでもないなあ」

と思いつつ、神樹館小学校の正門まで琴晴は歩きながら今日あつた事を考えていた。

琴晴（……他の勇者の三人と出会えたり、まあ……三ノ輪さんとは話せてないから

明日話しかけてみよう！　うん……今日は色々あつて疲れたなあ……）

と疲れていた。

琴晴「でも色々おじさんに話せる話も沢山あるし、帰つたらいっぱい話そつと♪」

と考えていたらすぐに正門に着いていた。

琴晴「えーと……おじさんの車は……あつ！　あつた」

と吾郎の車の方に寄つていった。そして

琴晴「おーじさん♪」

吾郎「ん？　なんや琴晴か、終わったのか？」

琴晴「ようやく終わったよー、疲れたー」

吾郎「お疲れさん、今日の夕飯何にする？」

琴晴「カレーが良い！」

吾郎「ええで、今日はカレーやな」

琴晴「わーい！やった！」

と話しつつ二人は自宅へと帰っていった。

その夜……夕飯を食べお風呂や歯磨きが終わった後琴晴は、学校であった話などを吾郎に話していた。クラスの話……同じお役目をする人たちの話などを沢山吾郎に話した。そして……

琴晴「z……………」

疲れが溜まっていたのか、寝てしまっていた。

吾郎「全く……よっこいしょと……」

と吾郎は琴晴を持ち上げて、布団へと連れて行った。

吾郎「お疲れさん……と言ってもこれからだけのお……」

そう言い吾郎も自分の部屋へと戻っていった。

その後、私は二度目の普通な小・中学校生活を送った……。色々質問責めにあつたり、勿論勇者三人達とも話しをした……。まあ、鷺尾さんに大日本帝国の事聞いたら、物凄く鼻息荒く説明してくれていたけれども……。愛国心強いなあと思った。後は……。周りの席の人達や図書室で同じジャンルを見ていて意気投合した人とか色々な人と話をして友達になっていた。とても楽しかった。でも、楽しいことって長くは続かなくて……。遂にあの日が来てしまったのです。そう

お役目の日が

参ノ儀くあおきこはるく

神樹様選ばれた、と聞いた時は凄いなんだらうけど思った
具体的にはどう凄いのか、実感が湧かなかった。

ただ、やってくる敵が世界を壊すものと聞いた以上は
戦わなくちや……そう思った。

はじめは、四人共無我夢中で倒していた。

この時は、まさか彼女が*****で私達と*****なんて
夢にも思わなかつた……

勇者御記 乃木園子

神世紀298年4月25日

神樹館6年1組 午前6:00

琴晴「今日は良い天気だね……鳥は歌い、花は咲き誇る。こんな気持ちの良い朝は……寝ることに限る……zzz」

園子「そうだねはるはる……ポカポカしててこのままねむっちゃいそうだよ……zzz」

と、言いながら寝てしまったこの二人は、一応勇者である。それぞれ青木琴晴と乃木園子という。2人とも早起きは苦手ではないのだが、学校に早く来て寝てしまうというよく分からない人達なのである。そしてそのまま時間が経っていき……

午前7:50

クラスの人がどんどん登校してきているこの時間帯ぐらいに琴晴は起きるのである。そしてそれに気づいたクラスメイト達は、

クラスメイトA 「あ、琴晴ちゃんおはよう〜」

琴晴 「ん〜…あつ、おはよう〜…」

クラスメイトB 「本当いつも寝ているよね〜」

琴晴 「まあね〜、今日は特に気持ちいい陽気が差し込んでいたからつい寝ちゃってね…アハハ」

と、たわいもない話をするのである。ちなみに園子は寝ている。そんなことをしていると教室にまた一人クラスメイトが挨拶しながら教室に入ってきた。鷺尾須美さんだ。性格を言ってしまうえば…堅苦しいと言うかなんというかとにかく真面目な子なのである。

須美 「おはようございます」

クラスメイトA 「鷺尾ちゃん、おはよう」

クラスメイトB 「おはよう〜」

と挨拶しながら鷺尾さんは、自分の席に向かいつつクラスメイト達に挨拶をしていた。そんな中自分は今日は何をしようかなと考えていた。すると、

須美 「おはようございます、青木さん」

琴晴「おはようー、鷺尾さん」

と鷺尾さんから挨拶された。のでちゃんと返した。とそんな鷺尾さんの視線は私から、自分の前の席の人に移った。そう現在進行形で机に突っ伏していて、寝言を言っているクラスメイトの園子に向けてだ。

園子「スピー……スピー……それは私の卵焼きだよ、サンチョ……」

琴晴「一体どんな夢を見てるんだか……」

と呆れつつも見ていたその時、急に園子の体が動き、

園子「スピー……あわわ！サンチョがサンチョが沢山いる……ってあれ？」

と焦り、叫びながら勢いよく起き上がった。サンチョが沢山いるってどういう状況なんだ……？という疑問を自分は思っていたら、鷺尾さんが

須美「ここは教室で、朝の学活前よ？乃木さん」

と冷静な突っ込みを入れていた。すると、途端にクラスは笑いに包まれた。

園子「あわわ……」

と照れ笑いをしつつ園子は自分の席に座った。

琴晴「全く……どんな夢みてたの？園子」

園子「えへへそれがねーこう、でっかいサンチョの中からねブワーって小さいサンチョ達が出て来てねー、そのサンチョ達の波に飲まれちゃったんよー」

琴晴「どんな状況よそれ……」

ちなみにサンチヨとは園子が持っている猫の枕の名前である。

園子「えへへ……あつ、鷺尾さんおはよう〜」

と、気が抜けた声で鷺尾さんに挨拶をした園子に対して、鷺尾さんは咳払いをし、須美「おはようございます、乃木さん」

と挨拶を返した。そしてそのまま時間が過ぎて行き……

午前8:20

先生が入ってきて朝の学活が始まろうとした瞬間、

・・・「イッタタタ……はぎーっすー間に合った!」

とクラスメイトの一人が教室に駆け込んできた。

安芸先生「はあ……三ノ輪銀さん」

と安芸先生は三ノ輪さんに近づき……、おもむろに手に持っていた出席簿で軽く頭を叩いた。

安芸先生「間に合ってますん」

銀「痛ったー!先生痛ったー!」

とクラスはまた笑いに包まれた。

安芸先生「早く席に着きなさい」

銀「はい……」

とトボトボしつつ足早に自分の席に座った。そんな三ノ輪さんは自分の席に座ると直ぐに隣のクラスメイトに話しかけられた。

クラスメイトC「ねえねえ、なんで今日遅れたの？」

と遅れた理由を聞いていた。

銀「まあ……6年生にもなると色々あるんだ」

と言いながらカバンを開けると……

銀「あつ……」

何もなかったのである、有るべきはずの教科書がカバンの中になかったのである。つ

まりは……

銀「教科書……家に忘れた……」

そういうことであつた。それは置いといて先生は、

安芸先生「日直の人、号令を」

と言つた。

須美「はい」

と鷲尾さんが立ち上がり、

須美「起立」

鷲尾さんの号令で生徒達が立つ。そして

須美「礼」

礼をする、頭を上げて後ろを向き、

須美「神樹様に拝」

と礼をしつつ手を合わせ、

全員「二神樹様のお陰で今日の私達が在ります」

と神樹様に感謝を捧げ、

須美「着席」

これで生徒達は座って一連の流れが終わる、そしていつものように学校生活が始まるはずだった。

しかし、平穏な生活は

音を立てて崩れ去っていった。

勇者一同「「「っ！」」」

周りの時間が止まったのだ。これが意味することはただ一つ

琴晴「これってまさか……」

と鷲尾さんに言った。

須美「うん……遂に来たんだ……私達が

その瞬間私達は光に包まれた。

須美「っ！」

園子「わわわわ!!」

銀「なんだ!?!」

琴晴「うわあっ！」

お役目をする時が

そして目を開けた時映ってきた景色は、もはや別の世界のような景色であった。人も建物も、何もかもが木になっていた。

園子「すつごうい！」

須美「これが神樹様の結界……」

銀「おおお!!」

琴晴「樹海……か」

と勇者達が樹海を見ていると遠くに橋みたいなものを見つけた。

園子「ねえねえ！あれが大橋かな？」

銀「多分あれかな？原型をだいぶ保ってる」

須美「こちらと壁をつなぐ橋……あそこから敵がやってくる……」

琴晴「でもわかりやすくして良いよね！あそこからくるってわかってるんだから」

須美「そうね」

銀「くう……私達が勇者だなんて興奮するな！」

琴晴「確かに……心が躍るね」

須美 「二人とも！遊びじゃないのよ」

銀 琴晴 「分かつてるって！」

須美 「はあ……」

と鷲尾さんが頭を抱えていると園子は遠くの方で何かを見つけた。

園子 「ねえ！あれ見て」

と園子が指差した方向にいたのは……とても大きい、非現実的な生物。

琴晴 「あれが……」

園子 「バーテックス……」

そう彼女たちが戦う敵、バーテックスであった。

銀 「つていうか、でかくないかあれ？……」

須美 「……でも、あいつが橋を渡って神樹様に辿り着いてしまったら、私達の世界は

……」

銀 「ああ、分かつてるって」

琴晴 「そのためにここまでできたんでしょ？」

園子 「私達で止めないと！」

須美 「皆！お役目を……果たしましょう！」

園子 銀 琴晴 「「うん！」」

と全員が頷き、4人はスマホを取り出してアプリのNARUKOを開いた。このアプリには樹海に來ると隠された機能が使えるようになっており、それを使うことによつて彼女達は勇者になるのである。

あめつちにきゆらかすはさゆらかす

かみわがもかみこそはきねきこゆきゆらかす

みたまがりたまがりまししかみはいまぞきませる

みたのみみいまししかみはいまぞきませる

そう祝詞を唱え4人はスマホの画面をタッチした。

1人は青い勇者服を身に纏い、弓を持つ清楚な花へと

1人は紫の勇者服を身に纏い、槍を持つ優雅な花へと

1人は赤い勇者服を身に纏い、両手に斧を持つ情熱な花へと

1人は白い勇者服を身に纏い、剣を持つ偽善な花へと

それぞれが変身し、そして実感したのだった。これが勇者なのだ。

須美「これが……勇者の力」

銀「おお、この服カッコいい！」

園子「初の実戦……頑張るぞ〜」

琴晴「なんか、いける気がする！」

初めてのお役目という事もあり少し興奮気味な勇者達、

園子「合同訓練がまだだったけれど……」

琴晴「仕方ないよ。ね？ 鷺尾さん」

須美「ええ、ご神託よりも早く来てしまったけれど」

銀「まあ、なんとかなるって！」

と話していると、琴晴は

琴晴「んー？ これなんだろう……」

と疑問を持った。なぜ疑問を持ったか？ というところ、自分の持っている剣に切れ目が入っていたからだ。

須美「見せてもらってもいい？」

琴晴「いいよ、ほい」

と鷺尾さんに自分の剣をみせた。

須美「うーん……」

琴晴「何か、分かった？」

と問いかけるが、

須美「ごめんなさい、私にはわからないわ」

と鷺尾さんは言った。

琴晴「大丈夫、戦ってれば分かるだろうし。ありがとうね」

と琴晴は言った。すると隣から

銀「よし、やるぞ！」

と言つて三ノ輪さんが先行し、

園子「待つてくミノさん！」

と園子が慌てながらもそれに続き、

須美「待つて！二人とも」

琴晴「やれやれ……」

と鷲尾さんは焦りつつ、琴晴は呆れつつ二人を追いかけた。

銀「しっかし、広いなあ……見渡す限り一面木だらけだよ」

園子「ここが元々は町だなんて……不思議だね」

琴晴「確かに、そうには見えないもんね。」

須美「……」

と話しながら勇者達は大橋の前まで来たのだった。一抹の不安がありながらも。

そうして四人は初めて敵の前に立った。そして改めて思う。

銀「はー……でっかい！」

園子「これが……」

須美「向こうから来る敵……バ・テ・ツ・ク・ス」

琴晴「改めて見るとやっぱり……怖い……けど私達がやらないと！」

と勇者達はそれぞれ思いつつも改めて気合いを入れ直した。

須美「とりあえずどんな攻撃をして来るのかわからないから慎重にいき「速攻でやっ
てやる！」ちよつと!?三ノ輪さん！」

と鷲尾さんの話をあまり聞かずに三ノ輪さんは突っ込んでいった。

琴晴「だつたら私も！」

と琴晴も続くように地を蹴りバ・テ・ツ・ク・スへと攻撃を仕掛けていった。

園子「だつたら私もく」

と少し遅れながらも園子もバ・テ・ツ・ク・スへと突っ込んでいった。

須美「ああもう！皆勝手に行動して……」

と言いつつも弓に矢を番え、バ・テ・ツ・ク・スへと攻撃を仕掛けていく。

琴晴「三ノ輪さん！私は右をやるから左をお願い！せえりやあああ！」

銀「OK！任された！はあああ！」

と二人はバーテックスの器官の一部だと思われる二箇所へ左右から攻撃を仕掛けた。
しかし……

琴晴「しまった！傷が浅い！」

銀「丸っこいから切りづらい！」

と言っているうちに傷付けたところが再生していく。

銀「しかも傷付けたところが再生してる!?ずるいだろー！」

琴晴「なら再生する速度よりも早く切り刻む！」

銀「ああ！」

と二人は再び武器を構え直し、地を蹴ってバーテックスへと突っ込んだ。しかし敵もやられてばかりではなかった。

須美「二人とも！何か来るわよ！」

と鷲尾さんが言ったそばから相手の頭の器官から沢山の水泡が出てきて二人を襲った。

琴晴「なにこれ！くつつついて……離れない！」

銀「動きにくい……！」

二人の体に水泡がくつつついていき身動きが取りにくくなり、そのまま重力に沿って落

ちていく。

銀 「うわああああ！」

琴晴 「落ちる〜！」

園子 「はるはる！ミノさん！」

須美 「乃木さん、危ない！」

園子 「っ！しまった！」

と二人を心配した園子は一瞬そちらの方に気が向いてしまい、次の行動を遅れさせる結果になった。今度は右側の器官から水が圧縮され、水の奔流を園子へと放出した。

園子 「うわわわ……わああああ〜」

須美 「乃木さん！」

園子は間一髪避けたが、足場が狭く近くの木へと落下していった。

須美 「私が……なんとかしないと！」

と鷲尾さんは弓に矢を番えていき連続で放っていく、しかし矢はことごとく水泡に阻まれて敵には当たらなかった。

須美 「なっ!?!………だったらこれで！」

と弓の両端が伸び、矢の先端部分にチャージの時間を表している花びらが一枚一枚溜まっていく。

須美「はやくっ！……溜まって！」

とチャージが最大まで溜まるのを相手が待っている訳がなく、水泡で攻撃を仕掛けて来る。

須美「不味い！」

琴晴「させないよっ！」

下に落ちていた琴晴が復帰し、鷺尾さんに向かっていった水泡を次から次へと斬り伏せてゆく。

琴晴「私が守っているから今のうちに！」

須美「……っ！ありがとう、青木さん！」

と再びチャージを始める鷺尾さん、それを止めるためにバーテックスは水泡で攻撃するが、

琴晴「無駄無駄ア！鷺尾さんには指一本触れさせないよ！」

片っ端から水泡を斬り伏せて行く琴晴、そして……

須美「溜まった！青木さん！」

琴晴「わかった！」

と鷺尾さんがいい、琴晴は射線から外れ、

須美「いっ……っ！っえ！」

園子「展開っ！」

と槍の穂先の部分が傘のような形をした盾に変形し、バーテックスの攻撃を受け止めた。

須美「乃木さん！」

琴晴「園子！大丈夫!？」

園子「えへへ、大丈夫なんだぜ〜！」

と二人に向かって笑顔を見せた園子を見てホッとした二人であった。そして、

銀「離れろお！」

と銀は水を出している器官に向かって攻撃を加え、3人に対しての攻撃をやめさせようとしていた。その目論見は成功しバーテックスは3人に対しての攻撃をやめ少し後退した。その隙に銀は3人と合流した。

銀「皆、大丈夫か？」

須美「私は大丈夫よ」

琴晴「問題ないよー」

園子「園子も無事なんだぜ〜」

とみんなの無事を確認できホッとしていたのもつかの間……

銀「もがっ!？」

須美「三ノ輪さん!？」

琴晴「銀!？」

園子「ミノさん!？」

と銀の頭にバーテックスの水泡が当たり、そのまま頭が包まれてしまった。

銀「もがっ!もがもが……もがー!」

須美「これっ!弾力があつて……」

園子「あわわ、どうしよう」

琴晴「どどど、どうする?切る?」

と焦ってしまったている琴晴は剣を構えた。

園子「落ち着いて、ミノさんもろとも切っちゃうからストップ!」

琴晴「た、確かに……」

須美「でもこのままじゃ三ノ輪さんが……」

とその時、三ノ輪さんの目が見開き、頭に被さっている水を………飲み始めた。

須美「飲ん!?!……ええ……」

琴晴「飲んだー!？」

園子「おー!ミノさん凄〜い!」

と銀が行なった奇想天外な行動に三者三様の反応を見せる3人。そしてそのまま飲

みきり……

琴晴 「飲み干した……」

須美 「……はっ！」

琴晴 「大丈夫？ 鷺尾さん」

須美 「大丈夫、少し驚いていただけだから」

琴晴 「お、おう……」

とそんなことをしている横で、

園子 「大丈夫？ ミノさん」

園子は銀の無事を確かめていた。

銀 「大丈夫！ 神の力を得た勇者に水を飲み干すことなど造作もないことなのだから！

………気持ち悪い………」

琴晴 「味とかはあったの？」

銀 「味は……最初がサイダーで途中から烏龍茶になった………まじゆい………」

琴晴 「不思議な味だね……」

須美 「つて！ そんな事よりも早くあいつを追いかけないと！」

琴晴 「うん、それは分かっているけどちよつと待つて」

と今にも飛び出しかねない鷺尾さんを止めた。

須美「でも！」

銀「でもこのままでとさつきと同じようになるからなあ……」

須美「……確かに、でもしたらどうすれば……」

琴晴「そうだよね……、ダメージ与えられそうなのって私と銀ぐらいだし……」

銀「でも、水が邪魔で近づけないんだよな………だったら根性で！」

琴晴「それではどうにか頑張ってたれもう倒していると思う……」

銀「だよなあ……うーむ……」

と全員が悩んでいると、

園子「あつ！ピツカーンと閃いた！」

と何か思いついたのか園子が言った。

園子「ふっふっふ……ちよつと来て来て」

須美 銀 琴晴「？」

と3人を自分のところに引き寄せて、考えついた内容を話した。

須美「確かにその方法なら行けるかもしれない……」

琴晴「いいんじゃない？これ以外に方法もないだろうし」

銀「だな！ナイス園子」

園子「えへへ褒められちゃったんだぜ！」

と皆が園子の作戦に納得し、それぞれの得物を握り直した。

園子「それじゃあ、展開っ！」

と園子の槍の穂先が盾になり、3人がその盾の裏に隠れた。

園子「いっくよく、準備はいい？」

須美「ええ……でも……」

銀「鷲尾さんは心配性だなく、絶対大丈夫だつて！」

琴晴「さつきも受け止めれたしね」

と言つてもまだ鷲尾さんは心配そうにしていた。そしたら園子が、

園子「それに、今度は4人なんだから！きつと大丈夫！」

須美「乃木さん……」

と言つた。その言葉のお陰か鷲尾さんの顔は不安そうなものではなく、必ずやれる！

と自信満々なもに変わっていた。

須美「ありがとう……それじゃあ行くわよ！」

園子 銀 琴晴「おー！」

と鷲尾さんが言い、盾の外から矢を放った。その矢はバーテックスに当たり、こちらの存在に気がつきこちらに体を向け始めた。そして鷲尾さんが盾の後ろ側についた。

園子「こつちに気づいたみたいだよ」

琴晴「さーて、私たちが頑張らないとね銀？」

銀「そうだな！ やつてやるぞ〜！」

須美「っ！ 攻撃が来るわ！ 注意して！」

とバーテックスがこちらに向き終わり、頭の器官から水泡を出し始めた。その攻撃は鷲尾さんの矢と園子の盾で防いでいく。そして段々とバーテックスとの距離を縮めて行く。しかし……

須美「！あの攻撃が来るわ！」

水泡などの攻撃が効かないと分かったのか、右側の器官の水が圧縮しそれを再び打ち出した。その攻撃は園子の盾に当たり、とてつもない激突音が辺りに響いた。

園子「台風の強いところにいるみたいだよ……」

須美「乃木さん！」

と全員で盾を支え始めた。

園子「ありがとうね〜！」

琴晴「全く…重いつたらありやしない！……」

須美「でも…これさえ耐えられれば！……」

銀「勇者は根性…！押し返せええ！」

とバーテックスの攻撃を耐え続けていると、攻撃が弱まった。

須美「ここ！」

琴晴「突撃い！」

と一気に飛び出しバーテックスの懐へと向かう。だがそう簡単に懐には入れはしない、バーテックスは叩き落とそうと水泡を出して行く。

園子「鷲尾さん！」

須美「狙いにくい！でも…当てる！」

と4本同時に矢をつがえて行く、

園子「ミノさん！はるはる！飛ばすよ！」

琴晴「うん！」

銀「思いつきりやって！」

園子「うんとこしよ〜！」

と琴晴と銀を思いつきり飛ばし、それと同時に進行上にある水泡を鷲尾さんが矢で射

抜いて行く。

銀「不味い！飛距離が足りない！」

琴晴「だったら！私の剣の腹に乗って！」

銀「わかった！」

と銀は琴晴の剣の腹に乗り、

琴晴「おおりやああああ！」

と剣をフルスイングし銀を再び加速させた。

須美「三ノ輪さん！」

園子「ミノさん！」

琴晴「いっけええ！」

銀「はあああ！」

銀の二つの斧が燃え盛り、バーテックスを切り裂いた。

銀「まだまだああ！」

と銀はバーテックスに向かって折り返し体のほぼ全てを切り刻んでいった。

銀「てりやああああ……うわ!？」

と銀はバーテックスの堅いところに弾かれて近くの木まで吹っ飛ばされていった。

園子「ミノさん!？」

須美「三ノ輪さん!」

と2人は心配するのをよそに、銀は叫んだ。

銀「どうだああ!!」

そして暫くの静寂があつた後、樹海が光り輝き始めた。

須美「これ……」

琴晴「まさかこれが……?」

園子「鎮花の儀……?」

周囲が光り輝き、空から花びらか舞い散ってくるという、とても幻想的な風景が広がっていた。

銀「はー……凄い……」

園子「大丈夫?ミノさん」

銀「大丈夫!それにながつり弱らせてやったし」

園子「ミノさんのお陰で始まったよ!鎮花の儀が」

須美「……!」

と鷲尾さんの目にはボロボロになったバーテックスが写っていた。と目の前を花びらが通つたと思つていたら、バーテックスはそこから姿を消していた。

須美「……消えた」

そうして鎮花の儀が終わり段々と元々の樹海へと戻っていった。

銀「つてことは……撃退できたのかな……？」

と銀と園子は向き合って、

銀 園子「やったー!!」

と喜んでいる一方、琴晴は地面に寝転んでいた。

琴晴「終わった……か……」

と琴晴は息を吸い、

琴晴「疲れた……」

そう言い体の力を抜いたその時、樹海に来た時と同じように光に包まれた。

そうして私達の始めてのお役目は終わったのだった。

肆ノ儀くかいきく

そして光が収まり、勇者達は大橋の近くにある祠の前に居た。

琴晴「……ここ……何処？」

銀「多分……大橋の近くにあった、立ち入り禁止の祠のところじゃないかなうって私は思う」

と琴晴の問いに返した銀、その横で園子が納得したように

園子「そういえばそんな所があつたようなく……」

銀「というか、お役目が終わつたら学校には戻る訳ではないんだな」という問いに

琴晴「そうだね、流石の神樹様もそこまでは無理なんだろうね」

琴晴が答えて、その隣で園子が

園子「そっか、学校に戻る訳じゃあないんだく！」

と言つた。すると

銀「あ！」

と、いきなり銀が何かを思い出したかの様に声をあげた。

琴晴「どうしたの？」

銀「靴、上履きのままじゃん！」

琴晴「今更……？」

銀「あはは……、！そうだ」

と銀はおもむろにスマホを取り出した。

銀「樹海！撮ったんだっさ」

琴晴「そういえば撮ってたね、樹海のこと」

園子「どんな感じ？」

銀「待ってろって……あれ？」

園子「どうしたのミノさん？」

と銀の携帯に写っていた写真は樹海の景色ではなく、普通の風景写真へと変わっていた。

銀「樹海じゃなくなってる……」

琴晴「どれどれ？……本当だ」

園子「写らないようになってるんだね」

銀「むむむむ……」

琴晴「まあ仕方ないさ、お役目の事は秘密裏のことなんだから、情報の規制は厳しくもなるし」

銀「むう……」

と二人が話しているうちに、園子は先程から何かを考えている鷺尾さんへと近づいていった。

園子「おい鷺尾さん〜?」

須美「……………」

園子「鷺尾さん家の須美さん〜?」

須美「……………」

園子「シオスミ〜?」

須美「……………」

園子「すみすけ?」

須美「……………!の、乃木さん!いつからそこに?」

園子「さつきからだよ、全然反応してくれなくて少し寂しかったよ〜」

須美「そ、それはごめんなさい」

と頭を下げて謝った鷺尾さん、

園子「大丈夫だから、頭を上げてすみすけ?」

須美「……わかったわ」

と言い頭を上げた。するとそこへ、

安芸先生「貴方達、大丈夫？」

と言いながら安芸先生がこちらに歩いてきた。

琴晴「安芸先生！」

と琴晴が言い、四人は安芸先生の周りに集まった。

安芸先生「皆さんお務めご苦勞様、これからの事なのだけれどまず大赦直屬の病院に向かいます」

と安芸先生が四人を労いつつ、これからの予定を話していく。

安芸先生「そこで簡単な検査を行ってもらいます、何か体に異常が無いかということ調べるだけなので直ぐに終わると思うわ。分かりましたか？」

と言い、四人は頷いた。

安芸先生「なら、近くに車を停めてあるから向かいましょう、付いてきて」

勇者達「はい！」

そうして安芸先生に付いていき、公園の近くに停めてあつた先生の車に乗り込み大赦直屬の病院へと向かった。

そして病院に向かう途中琴晴は車の中から外を見ていた。そこには日常が広がっていた。怪物などが襲って来ていて、先程まで人類の危機だったというのにだ。今の時間帯はお昼ぐらいなのだろうか、お昼を食べているサラリーマンや、小学校の校庭で無邪気に遊ぶ学生達、洗濯物を干している主婦などが見受けられた。普通の、至って普通の日常の風景が琴晴の目の前には広がっていた。しかしその様な日常の裏で私達勇者はこの日常を守るために戦っている。そこまで考えて琴晴は頭を少し振った。

琴晴（普通の人であれば、ここでさらに頑張ろうって気になるんだらうけど……私は……）

そう、琴晴は普通の人ではなく転生者でありこの世界、そしてこのお役目を共にこなしている三人の行く末を知ってしまったている人なのである。だから、

琴晴（残酷だよな、この世界って……）

そう考えてしまった。その後は病院につき簡単な検査をしてその場で解散となった。それと病院の人は検査ではなく点検と言っていた。そこはよくわからないので考えない様にする。ちなみに銀はバーテックスの水を飲んでいたことで少し嚴重に検査されていた。そしていつもはおじさんこと吾郎さんに送り迎えをもらっているが、今日はどうかやおじさんは仕事で忙しく大赦の人に家まで送ってもらった。

青木家

琴晴「ただいまー……と」

家に帰って来た琴晴、まだおじさんは帰って来てないらしく靴を脱いで家の中に入っていく。そこからは制服を脱いでハンガーに干して、替えの下着とタオルを持って、風

呂場へと向かう。そこから着ていた下着等を籠の中に入れて、着替えなどを洗濯機の上に置いておく。

そしてシャワーを浴びて……というのがいつものルーティーンだったのだが……

琴晴「うわあ……なにこれ……」

と琴晴が驚いた理由は、自分の体にあつた。全身までとは言わないが傷が身体中の所々に存在していたからだ。

琴晴「傷だらけになるっていうのは覚悟していたけど、これ程とは……」

と思いつつもシャワーを浴びようとした、しかし

琴晴「痛っあ！……やっぱり染みるよな……」

と若干涙目になりながらシャワーを浴び終え、タオルで水気を拭きつつ着替えて、蔵庫の中から牛乳を取り出してコップに注いで、飲みつつテレビのニュースなどを見ていた。そうすると玄関から鍵が開く音がして、

吾郎「ただいまあ」

と吾郎の声が響いた。

琴晴「おかえりー」

吾郎「おう、もう帰ってたんか。迎えに行けなくてすまんなあ」

琴晴「大丈夫、おじさんも仕事が忙しいんだから」

吾郎「すまんなあ、さてと今日の料理当番はワシやな」

琴晴「頑張れー」

吾郎「おう！」

と吾郎は着替えて料理を始めていく。今日の夕飯はなんだろうな、と考えながらテレビをボーッと見ていた。すると、

吾郎「出来たで、簡単なものだけれどなあ」

と目の前出されたのは、冷しゃぶにご飯、そして味噌汁やら漬物などがどンドン並べられていく。

琴晴「おー、美味しそう！」

吾郎「せやろ?…ほい箸」

琴晴「ありがとう…さて！」

二人「いただきます！」

その言葉を皮切りに二人は黙々と食べ続けた。

30分後

二人「(づ)馳走様でした！」

琴晴「ふう…:…じゃあ片付けは私がするね?おじさん」

吾郎「おう、じゃあワシはシャワー浴びてくるかの」

と言ひ、琴晴はキッチンで皿洗い、吾郎は風呂へと入りに行つた。

その後は世間話をして、今回のお役目の事を話せず仕舞いで寝てしまつた。明日話せば大丈夫でしょうと琴晴は軽い気持ちでいたが、そこから二日も経つてしまつた。

二日後、神樹館小学校 放課後

琴晴「ああ……どうしよう」

琴晴は頭を抱えていた。理由は……まあお役目の事を二日も経つて言えてないことであつた。

園子「どうしたの？はるはる」

琴晴「いや……色々あつてね、親にお役目の事言えてないんだよね……」

園子「なんで？」

琴晴「なんだろう……でもなんか言いにくいんだよね……」

園子「でも、言わないとはるはるの気持ちは伝わらないよ？」

琴晴「だよね……よし！今日絶対に言わないと！」

メラメラと外から見えるぐらい、琴晴は燃えていた。

園子「おー、はるはるが燃えてるんよ！」

と言っている二人の隣で、いきなり鷺尾さんが立ち上がり

須美「あ、あの！乃木さん、三ノ輪さん、青木さん！」

銀「お、どうしたの鷺尾さん？」

園子「何々々？すみすけ」

琴晴「ん？どうしたの……っっていうか何故にすみすけなのかい？園子さん」

園子「んく？なんかねくいつのまにか呼んでたんよ」

琴晴「ええ……自覚なかったの？」

須美「そ、それよりも！こ……これからしゅ、祝勝会でもどうかしら……」

と三人は驚いた。それは何故か？それは彼女の性格からすれば驚くべき行動だったからだ。そしてその返答は、

三人「勿論!!」

と言う肯定だった。すると園子が

園子「そしたらどこでやる？」

と聞いた後にすぐに答えたのは

銀「だったらイネスのフードコートでやらない？」

銀であつた。

園子「いいね！そしたら今すぐ行くんだぜ」

ともうやる場所が決まつてしまい、これに鷺尾さんと琴晴は

須美「……早い」

琴晴「あはは……流石というべきなの……かな？」

鷺尾さんは行動力が高い二人に驚き、琴晴は呆れ半分尊敬（？）半分といったところで

あつた。

銀「二人とも！早く行こうぜ！」

須美「あ！ちよ……ちよつと待つててば！」

琴晴「はあ……おじさんに遅くなるってメールしといてつと、今いくよ」

と走り出していた三人を追うように琴晴は走り出した。

イネスのフードコート

琴晴「やつぱり、いつ見てもでかいよねイネス」

銀「そうそう！なんてったって中に公民館もあるからね！」

と四人は近くにあったテーブルに座りつつ話していた。ちなみに琴晴以外は全員飲み物だけなのだが……

園子「おー、それ食べれるの〜？」

と琴晴の前に置いてあったうどんは、肉ぶつかけうどんの大盛りであった。

琴晴「まあ……うん、多分いける。」

須美「残したらダメよ？」

とジト目でこちらを見ている。

銀「それよりも鷺尾さん、早く早く」

須美「そ、そうだったわね……では」

と一呼吸置いて

須美「今日という日を無事に迎えられましたことを大変嬉しく思います……本日も大変お日柄もよく、神世紀二九八年度勇者初陣の祝勝会ということで参加者一同には……」「ええい固つ苦しいぞ〜！かんぱ〜い！」ええ……」

と鷲尾さんが少し長く話していたところに銀が割り込み、乾杯を言った。まあ、少し鷲尾さんが可愛そうだけれど始まったから食べ始めるけどね……

さてとまずはうどんを一口……おお、美味しい流石はうどん県、うどんはコシがあり汁がよく染み込んでいても美味しい。さてさて三人が何か話しているけど、少し無視しておいて……次にお肉だ。これでもかかと乗せてあるお肉、まずは一口……美味しい。肉の味がうどんと合う様に作られていてうどんと一緒に食べることでさらに美味しく感じる。流石は香川、お肉さえもうどんを引き立たせる役にするなんて……如何にうどんに自信を持っていないければ出来ない芸当だ……箸が止まらない！そして汁だ、汁も普通は肉の味が入ってしまい濃く感じてしまい飽きてきってしまうが……美味しい！まさか……？肉の味が入る事を予想して味を薄くしていたのか！すごいな、このクオリティでチエーン店だなんて……恐るべしうどん県……うどんへの愛は世界……いや宇宙………か

などと考えながら食べているといつのまにか食べきっていた。

琴晴「…………ご馳走様でした」

銀「早っ!？」

園子「おー、すごーい!」

須美「一体どこにその量が入っているの…………?」

と三人共驚いていた。

琴晴「あ、そういえば何話してたの? 食べるのに夢中になっていて聞いてなかったの、ごめん」

と水を飲み干しつつ園子に聞いた。

園子「えーとね…………すみすけがね? 仲良くして欲しいっていったの」

琴晴「なるほどね…………」

と鷲尾さんが頬を赤らめて言った。

須美「そ、それで…………」

と銀が笑いつつ言った

銀「何言つてんだ! 私達はもう友達だろ?」

園子「そうそう! 友達に気遣いは不要だぜ〜!」

琴晴「そういうこと、私も友達作るの苦手だね。友達になってくれるのは私も嬉しいかな」

須美「三ノ輪さん、乃木さん、青木さん！」

と鷺尾さんの顔が明るくなっていた。

園子「いや、ついすみすけと心置きなく話せるよ」

須美「……あのね乃木さん？」

園子「どうしたのすみすけ？」

須美「そのすみすけっていうのはちょっと……」

園子「ありや？ダメなのか。うーんだったら……ワツシーナとか！アイドルぼくて

いい感じじゃない？」

須美「もつとダメよ」

とジト目で訴えかけている須美さん、少し可愛いなと感じてしまった。

須美「だいたい、乃木さんだってソノコリンとか嫌でしょ？」

と聞くが

園子「わあ！素敵！」

となぜか喜んだ。

琴晴「あはは……」

須美「ごめんなさい、忘れて……」

と少し頭に手をやった鷺尾さん

銀「まあ、園子のセンスは独創的だからな…」

とフオローを入れる銀、その時

園子「あ！閃いた！だったらね…」

わっしーってどうかな？」

須美「まあ……それならいいかな」

園子「うん！じゃあこれからもよろしくね！わっしー！」

と銀が何かを閃いたのか、皆に向けて言った。

銀「そうだ！これを機にみんな下の名前で呼び合おうよ！」

琴晴「お、いいんじゃない？」

園子「いいね！それなら早速……Hey！わっしー！」

須美「え、ええ……別に後でも大丈夫よ！」

銀「あら……ダメだったか」

琴晴「まあ段々と慣れていけばいいと思うよ、うん」

園子「そうだね」

そうやって祝勝会は終わっていきました。

これは勇者達四人の物語、神に選ばれた少女達のおとぎ話に聞こえるお話、いつだつて神に選ばれるのはまだ幼い無垢な少女達である、そして多くの場合その結末は

.....

銀「そうだ！せつかくだし連絡取り合える様にID交換しよう！」

琴晴「おお、ナイスアイデア！ということ、これが私のIDね」

園子「おー、流石ミノさん」

須美「あ、あの〜……」

三人「!?」

須美「これどうやってやれば……」

三人「あ?」

どうやらまだまだ先は長そうです。

ちなみにこの後帰って、おじさんにお役目の事伝えたら……知ってました。勝手に一人で悩んでいたみたいで少し肩を落としました。

伍ノ儀とつくんと

初めて私が他の勇者達と会った時、とても面白い人達だと感じた。

一人は硬い感じだった。打ち解けていくと、とても真つ直ぐで護国精神に溢れていてとても面白い子という事がわかった。

一人は最初は不思議な感じはどうして良いか分からなかった。でもこつちも同じで打ち解けていくと、とても個人的で友達思いな……やっぱり不思議な子だった。

そしてもう一人は二人目と同じで掴み所がなくて不思議な子で、でも打ち解けていくと、

人懐っこくて私達の中で一番食べていて、そして友達を大切にしている性格だった……しかしその性格が故にお役目で*****してしまった。

あの時私が止めていれば……

勇者御記 *****

私達が人類を守る為に勇者となって、初めてお役目を終えて数日後……

神樹館小学校 6年1組の教室 放課後

勇者達 「「特訓？」」

安芸先生 「そう、自分の持っている武器を分かっている人も居れば……」

と安芸先生は琴晴の方へと顔を向けて

安芸先生 「貴方のようにまだ分からない人も居る。」

と言った。そう、まだ琴晴の武器は自分でもよく分かっていないのである。

そして安芸先生は話を続ける。

安芸先生 「練度不足の状態でお役目をするのは大赦側としても良くないと感じている

の。だから……」

須美「その為の特訓……という事でしようか先生」

と須美が言った。

安芸先生「そういう事になるわ、そのような事だから明日からの休日である一週間を使って特訓を行います。午前10時に大赦の訓練場に集合、場所は後でメールで送ります……分かりましたか？」

勇者達「分かりました！」

安芸先生「そう……では私は仕事があるから、気をつけて帰りなさい」

と言い勇者達は

勇者達「先生さようなら！」

そう言つて教室を出た。いくら勇者と言われていても中身は、まだまだ子供だということのを思いながら先生は仕事に戻るのであった。

通学路

4人は今日、安芸先生から話されたことを考えながら帰っていた。

琴晴「はあ……休日が……」

と琴晴は落ち込んでいた。

銀「仕方ないよ、これもお役目の為なんだからさ」

琴晴「むう……」

須美「それに、先生にも言われた通り私達はまだまだ練度不足よ、ちようにいいわ」

琴晴「むむむ……」

園子「神樹様がやられてしまったら元も子もないからね、頑張ろうよはるはる」

琴晴「……そうだね、頑張ろう！うん」

銀「あ！だったら特訓終わったらさ、イネスに私イチオシのお店があるんだけどさ、そ

こ行かない？」

と銀が提案した。

園子「おー！行きたい行きたい！」

須美「どんなお店なの、三ノ輪さん？」

銀「ふっふっふっ、それはだね須美さんや……秘密！その時まで楽しみにしといて

！」

と焦らす銀。

琴晴「……まあそうと決まれば、明日から一週間……頑張ろう！」

おー！、という勇者達の声が周囲に少し響き渡った。しかし……

翌日 大赦の訓練所

須美「……………つて言っていたのに、三ノ輪さんったら……………遅い！」

と須美さんは、ブンブンと怒っていた。

琴晴「まあまあ、落ち着いて須美さん」

と怒っている須美さんを宥めている琴晴と

園子「スピー……………」

呑気にうたた寝している園子、すると

銀「遅れてごめん！」

と言いながら、銀が訓練所に駆け込んできた。

須美「三ノ輪さん！あんなに張り切っていたのに……………どうして遅れてきたの」

銀「いや、それは……………とにかく遅れたのは自分の所為だし、今度こそ気をつけるか

らさっ！」

琴晴「まあ、銀もそう言ってますし……ここは穩便に……ね？」

須美「……………まあ、今度から気をつけてくれればいいですけど……」

琴晴「じゃあ、特訓を始めよう！……そのつち起きてー？」

園子「zzzz……ふええ？なあに？」

と寝ぼけている園子、少し場が和んだ。

その後は効率の良い鍛錬の方法や柔軟、それぞれの武器の達人による講習を、それぞれ行なっていた。しかし琴晴だけが一通り講習を終えると、別の場所へと移動する様に安芸先生が言った。そして

安芸先生「貴女には、自分の武器を知る為に個別で訓練してもらいます」

と言われ、琴晴は自分の武器を知る為に訓練をしていた。

琴晴「と言っても……ただの剣じやなさそうと言う事しか分からないのですが……」

安芸先生「そう言われても……大赦としては今までの勇者の中でも前例の無い武器であるから……申し訳ないけれど、どうしようもないの」

琴晴「そう……ですか……」

そう先生に返し、彼女は考え始めた。

琴晴（……この剣は一体なんなのだろうか？普通の物には無い切れ目みたいなのが剣の腹の部分にある。デザインだったりするのかな……でもなんか使っていて違和感を感ずるのだよね……それに何処かで見たことがあるような？……とりあえず行動して見ないとわからないか……）

そう言い琴晴は、剣を講習で教わった通りに刀を構えるように体の真ん中に構えた。そして先生が離れるのを確認し

琴晴「せええい！はああ！やああ！」

と袈裟斬り、横一文字、逆袈裟斬りそして最後に……

琴晴「てええい！」

真上から斬りおろし一連の動作を行ってみた琴晴。しかし……

琴晴（やっぱり違和感がある……この違和感は何？）

その後、琴晴は何度も何度も外が暗くなるまで振ってはみたものの、その日の特訓は分からないまま終わってしまった。

そして自分だけ終わるのが遅くなってしまい、他の三人は既に帰宅したと安芸先生から聞かされた。

琴晴「まあ、妥当な判断だろうね……みんな疲れているだろうし」

そう言い訓練所からでた琴晴。周りは少し薄暗くなっていて、もう少ししたら夜になるうとしていた時間帯だった。

琴晴「早くおじさんとの集合場所に急がなければ……つてあれ？あの姿は」

そう言つて琴晴の目についたのは、猫を助けようとしている銀の姿であった。

琴晴「おーい！銀さんやー、何してるの？」

銀「ん？琴晴じゃん！おーい」

と木の上から手を振っている銀。

琴晴「何してるの？」

銀「今ね……猫が降りられなくなっているから降ろしているところ……つとと！」

琴晴「危ない！」

と銀は木の上でバランスを崩してしまい落ちかけていた。その間に猫は自力で降りて近くの草むらへと姿を消していったのだった。

銀「アハハ……ハア……」

と溜息をついている銀。

琴晴「大丈夫？ほら手貸すよ？」

銀「サンキュー……危うく落ちるところだった……よつと」

と言ひ、銀は琴晴の手を借りて木から降りた。

琴晴「全く……こんな時間まで助けてたの？」

銀「いや……他にも色々あつてね。まあなんやかんやあつてこんな時間になつてしまつたのさ」

琴晴「なるほど……トラブル体質つて所なのかな？」

銀「まあ、そんな所だね……さて急いで帰らないと」

琴晴「え？こんなに暗いのに歩きで？」

銀「まあね……」

琴晴「そしたらさ……危ないし、銀の家まで送つてもらおうようにおじさんに言つてみる？」

と銀に言つた。

銀「ええ！それは……申し訳ないつていうか何とつか……」

琴晴「別に大丈夫だつて！ほら行くよ！」

と銀の手を取り、

銀「……有無さえ言わせてくれない……」
と諦めつつ、引つ張られていく銀。

吾郎「で……連れてきたと」

琴晴「別に大丈夫だよな？おじさん」

吾郎「まあ……この時間帯に一人つてのは危ないからのお、勿論ええで」

琴晴「だつてさ！」

銀「お手数をおかけします、えつと……」

吾郎「ん？ああ……そういうや挨拶せえへんかったな。青木吾郎や。よろしくな嬢ちゃん」

銀「三ノ輪銀つて言います。こちらこそよろしくお願いします。」

と挨拶する銀と吾郎。そして琴晴の方を向き

銀「それと琴晴！絶対にこのお礼はさせて貰うからね！」

琴晴「そ、そう……」

と銀は力強く言ってきた。そうして琴晴と銀は車に乗り込み、吾郎は車を走らせ始め

た。

その後、銀を家に送り琴晴と吾郎は自らの家へと帰つたのだつた。そうして帰つて来て夕飯やら家事やらを終わらした琴晴は、自分の部屋に居た。

琴晴「さて……と」

そうして何かをしようとしている琴晴の手元には、一冊のノートがあつた。

琴晴（今までは大丈夫だろうと樂觀視していた転生前の記憶だけども……正直、二年も経っているからか記憶が薄れてきている。このままじゃこれから何が起こるか、そして転生した目的さえも忘れるかもしれない……だからノートに書いて忘れないようにしよう）

そう思い、琴晴はノートにこれから起こること、そして目的を書いた。しかし……

琴晴（不味いな……、結城友奈の章の後の記憶が思い出せない、それに細かいイベント系も駄目だ……まだ、大事なことは思い出せるけれど……まさかここまで酷くなつていたなんて。ノートを付けようと思つて良かったな、これは）

そうして琴晴は大事なことを書いて行き、ノートを閉じた。

琴晴「これで大丈夫……と、後は見つからないように隠して……」

琴晴は本棚の奥の方にノートを隠した。そうして琴晴は布団に向かい、眠りについた。

翌日

銀はまた遅れてしまい須美に怒られていた。

銀「本当にごめんて、須美く……」

須美「むう……、仏の顔も三度までですからね！三ノ輪さん」

銀「ハイ……反省してます……」

琴晴「まあまあ……」

と三人の横でスヤスヤと寝ている園子さん。

園子「zzzz……わっしー、ミノさんく、はるはるく……ふふふく……」

銀「……相変わらず幸せそうに寝てらっしやいますなあ」

琴晴「まあ、そのっちらしいというか……なんというか」

須美「むむむ……私がしっかりしないと……」

とたわいのない話をしつつ勇者4人は、今日も特訓を行なっていた。

1週間後

そして時間は流れていって、最後の特訓の日。今日も他の三人と違う所で自分の武器が何なのかを確かめていた。

琴晴（結局1週間経つても分からなかった……、どうしようかなあ）

と少し考えながら目の前の巻藁を切って行く。1週間ずつと素振りだったり、巻藁を切っていたり、先生と相談していたりと色々やってきたが、それはどれも結果には結び付かなかった。

そんなことを考えていると、

琴晴（あつ！不味い！）

と考えながらやっていったからか、巻藁と自分の居場所の憶測を見誤って剣を振りそうになっている琴晴。

琴晴（考えながらやらなければ良かった……）

と少し後悔していると、

琴晴「え？」

なんと剣が切れ目の入っているとところから伸び始め、最終的に巻藁に当たり斜めに切り裂いた。そして剣の柄の方に伸びた剣先が戻ってきていつもの剣に戻った。そんな

光景を目の当たりにした琴晴は少し呆然としていた。

琴晴「本当に伸びた……ってそうだ、この事を先生に報告に行かないと！」

そう言い、パタパタと急いで先生の元へと向かった琴晴。

先生に聞いたところによると、どうやら私達より前の勇者も使っていなかった武器らしく、大赦にも武器の名前が分からなかった。とりあえずその武器の練習を行う事にした琴晴だったが、

琴晴「……難しい！」

そう、扱いがとても難しいのである。伸びた事によつて射程距離は伸びたが、少し気を逸らしてしまうと、伸びた剣先がピューンと飛んで行ってしまう……その様な扱いの難しい武器なのであった。

琴晴「はあ……はあ……あー、疲れた……」

そう言つて近くの飲み物を手に取り、飲む。

琴晴「……はあ」

残り少なかった水を飲みきり、近くにある時計を見る。

琴晴「えくと、今何時かなつと……もうすぐ5時か、そろそろ片付けしておかないと

なあ」

と言いながら琴晴は、端末を操作して自らの勇者服と武器を仕舞い、近くの掃除用具からモップを持ってきて床を掃除していく。

琴晴（しっかし……なんか何処かで見たことあるんだよなあ自分の武器……本当に何処だったかな）

とそんな事を考えつつ掃除して行く琴晴。

モップをかけ終わり荷物を持って、訓練所から出る。その際に訓練所に向かって一礼し、琴晴は帰路へとついた。

特訓の後、約束通りに私達はイネスに向かった。ここでは銀の一押しのお店……ジェラートのお店へと足を運んだ。

それぞれ、琴晴はバニラ、園子はほうじ茶 a n d カルピーン味、須美は宇治金時、そして銀は……

銀「これが私のオススメ……しょうゆ豆ジェラートだ！」

と自信満々に出してきたジェラートは、香川の郷土料理であるしょうゆ豆をジェラー

トに加えた一品であった。

銀「とりあえず、食べてみてよ！本当に絶品だからさ？」

と銀から一口貰ったそれぞれの反応は、

園子「……う〜ん？なんか不思議な味だよ〜」

銀「ありや？」

須美「良い味だとは思えけれど……これは大人の味ね」

銀「ありやりや？……あまり好評じゃないなあ……琴晴は？」

と先程から何も言わない琴晴に評価を聞く銀。

琴晴「……ま……い」

銀「え？」

琴晴「美味しいよ、これ！」

銀「本当に？」

琴晴「うん、まさかこんなに美味しいだなんて思わなかった……」

とまさかの琴晴の大絶賛、これには他の勇者も驚きを隠せなかった。そして琴晴が
しようゆ豆ジェラートのリピーターになるのは、そう遠くない話だった……

琴晴「今度からイネスに來た時、食べるようにしようつと……」

そうして勇者4人の特訓と、少しの休日が終わった。それは数少ない日常が終わり。そして命をかけた非日常が始まるのである。

そしてそんな彼女達の行先とは……

陸ノ儀くつてっだい

1+1+1+1+1を4ではなく、10……いや100にする。

私達なら、必ず出来ると思った。……違う、そうしなければいけなかった。

私達が戦う敵の名は、バーテックス。ウイルスの中から生まれた、忌むべき存在そう聞かされていた。

けれども、その様な忌むべき存在にバーテックス……***という意味を持つ言葉を付けるのだろうか？

この時はまだ、***に***だと知らなかった。

そして彼女も***だと、まだこの時の私達は知らない。

勇者御記 乃木園子

特訓から約一ヶ月後　三ノ輪家

琴晴「こんにちは、青木琴晴です」

琴晴は三ノ輪家の前に居た。

銀「はいはい！ちよつと待つてて！」

と家の奥から銀の聲が聞こえてくる。そして少し待つとドタドタと足音が奥から聞こえてきて目の前のドアが開いた。

琴晴「どうも」

銀「ごめんなー、休日呼び出しちゃって」

琴晴「別にいいよー、暇してたしね」

銀「そつか、ありがとね。……こんな所で立ち話もなんだし上がって上がって！」

琴晴「はい、失礼します」

そう言つて、三ノ輪家へと上がる琴晴。今回何故三ノ輪家に琴晴が居るのか、その理由は、

銀「弟が急に体調崩しちゃって、うちの親は仕事早くに上がって来るって言うてたけど……」

琴晴「人手が足りないんでしょ？何でもやるよ。あ、あとスポーツドリンク買ってきたよ。ほい」

そう言つてスポーツドリンクを手渡す、

銀「ありがとう、お粥も作らないと……」

琴晴「弟の方は大丈夫なの？」

銀「鉄男に任せてあるから、大丈夫……だと思ふ」

琴晴「なるほどね、だいたい分かった」

そう話しているとキツチンに着く。

銀「さてと、早速「姉ちゃん！」……任せてもいい？」

と銀を呼ぶ声が聞こえてくる。

琴晴「ん、大丈夫だよ。早く行ってあげて」

銀「サンキュー！」

そう言つて銀はスポーツドリンクとストロー、コップをもち弟の下へと向かった。

琴晴「さて、作りますか」

とお粥を作り始める。

琴晴「まずはお米……炊いてあるやつを使わせて貰うか。えーと……ご飯に対して水は……このぐらいでいいかな」

そう言つて小さなお鍋にご飯と水を入れていく、

琴晴「そしてこれを強火で煮ていく……それですぐに沸騰するから……したら少しかき混ぜて弱火にする」

琴晴「んで、蓋を少しずらして40分ぐらい煮る！つと」

とお皿を洗つたりしながら待つこと40分。

く40分後く

琴晴「そろそろいいでしょ、後は塩で味を整えて……梅干しつてあるかな？……失礼します」

と冷蔵庫を開ける琴晴。

琴晴「……あつた。めんつゆもあるからこれも持つて行こうかな」

そうして梅干しをお粥の上に乗せて鍋、取り皿、レンジ、めんつゆをおぼんに乗せて運んでいく。

琴晴「この部屋かな？……違う。こっちの部屋か……ここも違う」

そう言つて部屋のドアを開けては閉めを繰り返していく。

琴晴（何処に持つてくか聞いとけばよかった……）

後悔先に立たずである。

琴晴「ここか！」

銀「うわっ!？」

そうやって開けたドアの向こうには銀とその弟達が居た。

銀「びつくりした……大きな声出さないでね、今金太郎寝てるから」

琴晴「ご、ごめん……後お粥作つてきたよ」

そう言つて銀にお粥を手渡す。

銀「ありがとうね、起きたら食べさせてあげるから」

琴晴「ん」

そう言つて銀の右隣に座る。

銀「……あ、そうだ。弟達の紹介忘れてた。こっちの大きい方が鉄男。んで今寝ている方が金太郎。どっちも可愛いマイブラザーだ！」

と少しブラクゲブンゲブン、弟Loveな銀の一面を見た琴晴。

琴晴「青木琴晴です。よろしくね」

そうやって鉄男に向かつて手を出す琴晴。

鉄男「よ、よろしくお願ひします……」

と少し恥ずかしがりながらも手を出して握手する。

銀「鉄男く、なーにオドオドしてんだー」

鉄男「だって、姉ちゃんの友達だからどんな人かなって思ったら、予想外な人連れてきたから少し……」

銀「……どんな人だと思ってたの？」

鉄男「姉ちゃんみたいな少し男勝りな……ってイタタタ！」

と鉄男の頭を両手でグリグリする銀。

銀「だくれが男勝りな女子だってえ？」

鉄男「痛い痛い！姉ちゃん痛いつてば！」

銀「人が気にしている所にふれてくるデリカシーのないやつにはこうだ！」

鉄男「ギヤアアアア！」

琴晴「ふふっ」

と少し笑う琴晴。

銀「そういえばこの後どうする？暇なら少し遊んでいかない？」

鉄男「うう……」

琴晴「そうだね、暇だし少し遊んでいくかな……ん？」

そう言つて琴晴の目に付いたのはあるBlue-rayBoxであった。

銀「どうしたの?……ああ、仮面ライダー?」

琴晴「……うん、まさか有ると思わなかったから少し驚いた」

銀「鉄男や金太郎が好きだから、大赦に頼んでみたら届いたんだ」

琴晴「へえ……」

と納得している、

鉄男「イテテ……少しは手加減してよ……」

と鉄男が起き上がってきた。

銀「なら少しは言葉に気をつけないとね」

鉄男「はい……ってどうしたの?」

銀「ん、琴晴がね仮面ライダーのBlue-rayBoxあるって言ったら驚いてたつて所」

鉄男「え、もしかして……琴晴さんって仮面ライダー好きなんですか?」

琴晴「ん?まあ、好きだね」

鉄男「へえ〜!因みに好きなライダーって誰ですか?」

琴晴「好きなライダー?……エボルトとゼロノス、クローズやジョーカーあとBlue

ckとRXも好きだね」

銀「最初は良かったけど、最後の2つ……世代が古くない?」

琴晴「そう？世代が古くたってカッコいいんだけどなあ……」
と少し残念がる琴晴。

銀「やっぱり独特な感性だよな。琴晴って」

琴晴「鉄男君の好きなライダーって誰なの？」

と聞いてみる。

鉄男「自分ですか？自分は……エグゼイドですかね」

琴晴「へえ……銀は？」

銀「私？私は……ビルドかなあ、あそこはみんな好きだった」

琴晴「中々凄い所行くなあ……人の事言えないけど」

鉄男「あ、だったらせつかくだしエグゼイド見ませんか？」

銀「いいや、ここはビルドを！」

琴晴「なら……Blackを……」

銀 鉄男「ごめん（なさい）それはない（です）」

琴晴「だよなー……」

とシヨボンとする琴晴をおいといて、どっちを見るかを決めている二人。

最終的にエグゼイドを見ることになった。

鉄男「ふふん。」

銀「ぐぬぬ……」

琴晴「じゃあ見ようか……金太郎君が起きない様に音量小さくしてね」と一話から見始めた。

ダイジエスト

初変身時

琴晴「最初これがライダーだなんて驚いたもんなあ……」

銀「可愛いもんね」

鉄男「でも慣れてくると……うん」

銀「慣れてきても可愛いもんね」

「お前の運命は永夢……お前が変えろ！」

琴晴「貴利矢さん……」

銀「貴利矢……」

鉄男「……（泣いてる）」

「ホウジョウエムウ!!」

琴晴「ここ真面目なシーンだった筈なのにな……」

銀「そう考えると役者さん凄いやね……」

鉄男「……………(笑ってる)」

クロノス初変身時

琴晴「これ……最終的によく勝ったよね」

銀「まあ、エボルトよりかは勝てるビジョンは見えるよね、ムテキが出てからだけど」

鉄男「エボルトオ！」

「あれ?ノセられちゃった?」

琴晴「んんん……」

銀「ノセられちゃったよ……」

鉄男「貴利矢さーん！」

「次なんてない」

琴晴「この永夢、少し怖かったね」

銀「慈悲がないって感じだよね」

鉄男「ハイパー無慈悲」

OPの所

琴晴「そして繋がるっつと」

銀「良く考えてるよね」

鉄男「だから仮面ライダーって面白いんだよね」

「ホウジヨウエムウ!!」

琴晴「あつ、忘れてた」

銀「ここでも言うんだよね」

鉄男「……………（再び笑ってる）」

琴晴「まあ、ここも良いシーンだけれど……………前回のせいだなあ」

銀「黎斗エ……………」

そんな感じで見ながらお昼を3人で一緒食べたたり、金太郎のお世話をしているといったの間に6時を過ぎそうな時間になっていた。

琴晴 「もうこんな時間か」

銀 「ごめんね。こんな時間まで引き止めてて」

琴晴 「大丈夫大丈夫、自分もこんな時間まで居座っちゃってごめんね」

銀 「いいのいいの、こつちも助かったし」

鉄男 「楽しかったです！」

琴晴 「じゃあ外におじさんも来たみたいだし、これで」

そう言つて立ち、帰ろうとする琴晴。すると、

琴晴 銀 「……………」

先程まで外で鳴っていたカエルの声がピタツと聞こえなくなり、鉄男がこちらに走つてくる姿勢のまま止まっているのがわかる。

時間が止まったのだ。つまり、

琴晴 「これって…………」

銀 「まさかこんな時間に来るなんてね…………」

そう言つて二人は気合いを入れ直す。

琴晴 「よし…………行くよ銀」

銀 「分かってるさ！」

そう言つて樹海化を待つ二人。

景色が変わっていき二人は一ヶ月ぶりの樹海へと降り立った。そして着いた直後に勇者になり、急ぎ二人は大橋へと向かうのであった。

銀「おーい！須美！園子！」

と先に着いていた二人に声をかける銀。

園子「おー！ヤッホー、ミノさんくはるはるく」

須美「遅いわよ！三ノ輪さん、青木さん」

琴晴「ごめんね須美さん。それで敵は？」

須美「あそこよ」

と須美が指を指した方角に居たのは不思議な形をしているバーテックスであった、

園子「あのフォルムはく……天秤かなく？」

銀「多分そうじゃないかな……しっかし」

そう言つて目の前の敵を見る銀。

須美「……どうしたの三ノ輪さん？」

銀「ん？いやー……ウイルスから生まれたただであんな形になるものかなって考えて

いただけ」

須美「……まあ確かにそこは気になるけれど……まずは！」

そう言つて弓を構える須美。

琴晴「敵を倒さないと……だね」

須美「ええ」

そう言つて剣を構える琴晴。

園子「よし！それなら私たちも頑張らないとだね。ミノさん！」

銀「……了解！」

そう言つて二人も武器を構える。

銀「まずは私が！」

そう言つて敵に突っ込んでいく銀。

須美「三ノ輪さん！……また勝手に」

琴晴「私がフォロ―するから、須美は援護よろしくね！」

須美「……分かったわ」

琴晴「そのうち！須美のこと任せても？」

園子「OKだよ！バッチリ守るんだぜ」

そう言つて槍の先端を盾にして構える園子。そして琴晴は盾が展開したのを確認し、銀の下へ急ぐ。

銀「てりやあああ！」

と叫びながらバーテックスに斬りつける銀。しかし

(……！)

銀「うわわ！弾かれた！」

銀の攻撃をその場で回転し大きな分銅で弾くバーテックス、そしてそのまま逆にある小さな分銅で銀に攻撃をしようとする。

銀「まづっ！」

琴晴「させるかあ！」

とその分銅を弾く琴晴。

銀「サンキュー！」

琴晴「全く……前出過ぎ！」

銀「ごめんごめん……ってまた来た！」

そして回転して来た大きい分銅を避ける二人。

銀「コマみたいにクルクル回っていて、地味に近寄りづらい！」

琴晴「どうすれば……」

須美「はあっ！」

と後ろから須美が弓を放つも分銅に弾かれてしまう。そしてその場でさらに早く回り出すバーテックス。

須美「……………くっ！」

園子「どうしよう……………つてあれ〜？」

と急にそのつちが考え始める。

須美「どうしたの乃木さん？」

園子「なんか〜風が段々と強くなってる様な……………」

須美「風……………？まさか！」

前衛の二人に自分が思った事を伝えようとしたその時、風が突然強くなった。それこそ体が持つてかれるぐらいに。

琴晴 銀「「うわあああ!！」」

園子「ミノさん!はるはる!」

須美「二人とも!」

その風に巻き込まれてしまった二人はバーテックスの周りをグルグルと回っている。

琴晴 銀「「目えええ〜……………があああ〜……………まあああ〜……………わあああ〜……………るううう〜……………!!」」

琴晴（このままじゃ不味い!何か……………あの木だったら行けるか?）

琴晴「せええいいい！」

と持っていた剣の先を伸ばし近くにあった木へと深々と突き刺した。

琴晴「銀！」

と銀に向かつて手を伸ばす琴晴。

銀「うりやああ！」

とその手を掴む銀。

琴晴「戻れえ！」

と剣が段々と縮んでいき元の剣の形に戻っていく。

銀「あつぶな……ありがとうね琴晴！」

琴晴「良いってことよ……それよりも……」

とバーテックスを見る二人。

琴晴「どうやって倒せば……何か考えある？」

銀「いいや、さっぱり。こういう時は園子や須美の方が何か考え付くからなあ……」

琴晴「だよねえ……」

と悩む二人、するとスマホが鳴り響く

琴晴「ん？須美から電話？なんだろう……もしもしこちら琴晴です！」

そう言つて電話に出る琴晴。

須美『繋がった！二人とも大丈夫!?!』

琴晴「こっちは大丈夫！そっちは？」

須美『こつちもなんとか！それで乃木さんが何か考え付いたらしいの、変わるわね!』
そう言つてそのつちに変わる須美。

園子『手短に言うから聞いてね！この風つて台風みたいだから、もしかしたら台風の
目みたいなのがあるかもしれないって考えたの！そこから攻めればなんとかなるかも
!』

琴晴「なるほどね、中心部は風が吹いてないかもしれない訳だ！銀！」

銀「はいよ！そうと決まれば！」

と琴晴の体から手を離す銀。そのまま回りながら浮き上がっていき、これでもかとお
がった時フツと風がなくなった。

銀「ここが目の部分か！ならこのままあ！」

とその二斧に炎を纏わせながら突っ込んでいく。

銀「おおりやああ！」

とバーテックスの頭と思われる部分に斧が深々と突き刺さった瞬間、先程まで吹き荒
れていた風がピタツと止んだ。

銀「今だあ！皆あ！」

琴晴 「言われなくても！」

園子 「ズガガガガンって感じで行くよ〜！」

須美 「今まで溜めてた分……全部持っていきなさい！」

と上で二斧で乱舞している銀、下で剣を伸ばして鞭の様に扱い切り刻む琴晴、槍を巧みに使い敵をボコボコにしている園子、弓を溜めて溜めきつたのをゼロ距離で発射しその後で次々と矢を放っていく須美。そんな苛烈な攻撃にいくらバーテックスといえども耐えられる筈もなく、直ぐに鎮火の儀が行われた。

須美 「戦闘……終了、お疲れ様」

銀 「いやー……終わった終わった！」

園子 「お疲れ様なんだぜ〜」

琴晴 「終わった……か」

琴晴 (今日も無事に……)

その時

「……………」

と突然声が頭の中で響く。

琴晴（何だ……この声？）

園子「……はるはる？ どうしたの？」

琴晴「いや、何か声が……」

「し……た……い」

言葉が頭の中で響くと同時に頭が徐々に痛くなっていく。

琴晴（何だこれ……頭が……！）

須美「だ、大丈夫!? 顔が青いけれど……」

琴晴「だ、大丈夫……」

銀「そんな訳ないだろ!? 早く病院に行かないと……」

そして、

「生きたかった」

琴晴「……………ッ！」

銀「琴晴！」

園子「はるはる!？」

須美「青木さん！」

仲間達のその言葉を最後に、琴晴はそのまま膝から崩れ落ち意識を失っていった。

漆ノ儀々せいしん々

安芸先生「ごめんなさい、お忙しい中……」

そう言つて目の前に居る男性、青木吾郎に御礼を言つた安芸先生。

吾郎「大丈夫ですよ先生。用事が終わつて家に帰る所だったので」と返す吾郎。

吾郎「しつかし、まさか車が無いとは……」

安芸先生「ええ、まさか他の職員が借りていて公用車が一つも無いなんて……もう少し増やしたときなさいよ大赦……」

吾郎「ハハハ……とりあえず向かいますようか、先生？」

安芸先生「……ハッ！え、ええ行きましょう。よろしくお願いします」

と二人は車に乗り込む。そして車を勇者達が待つ公園へと走らせる。そして向かう車の中は、

安芸先生「……」

吾郎「……」

沈黙で包まれていた。暫く車を走らせ信号が赤で止まった時、沈黙を破り吾郎が口を

開いた。

吾郎「先生」

安芸先生「はい」

吾郎「彼女……琴晴は学校ではどうなんでしょうか？」

安芸先生「琴晴さんですか？」

吾郎「ええ、学校の話などは琴晴自身から聞いてはいるのですが。それに友人関係も心配は余りしてはいないのですが……」

安芸先生「それでも拭いきれない何かがある……という事でしょうか？」

吾郎「そうなりますね。いかんせん神経質な物で……」

と頭を掻く吾郎。

安芸先生「……愛しているのですね、あの子を」

と微笑を浮かべる先生。

吾郎「……ッ！そ、そうなりますね……」

と顔を赤らめる吾郎。

安芸先生「？」

と何故吾郎が顔を赤らめたのかが分からない安芸先生は、疑問を浮かべた顔をした。

吾郎「そ、それで彼女は先生から見てどのような感じなのですかね？」

と話を戻す吾郎。

安芸先生「彼女は……私から見てもとても良い子です。友人達との関係も良好ですし、勉強や運動の面に関しても特に悪い所は見受ける事はないですね」

吾郎「そう……ですか」

とホツとした吾郎。

吾郎「それなら、安心です。……そろそろ着きますね」

安芸先生「あつ、本当ですね。すみません送つて貰つて……」

吾郎「良いんですよこれぐらい……ってあれは？」

と二人の目には金髪の制服を着た子が辺りを見渡していたのが目に入った。

安芸先生「あれは……乃木さん？」

吾郎「確かその子って……」

安芸先生「あの子の近くに止めてもらつても……」

吾郎「分かりました」

そうして彼女の近くに車を止め、安芸先生が園子の元へと走る。

安芸先生「乃木さん！」

園子「あつ！先生！」

安芸先生「何があつたの!？」

園子「はるは……琴晴ちゃんか！」

吾郎「！……琴晴か？」

園子「あいつらを追い払った後いきなり倒れて……ぞこがらめをざまざなぐつで

……」

と最後の方は涙声になりながら話す園子、

安芸先生「……彼女は？」

園子「あぞこに……」

と琴晴達がいる方向に指を差す、

安芸先生「よく一人で頑張ったわ」

と園子を抱きしめる先生、

園子「ぜんぜい……！」

安芸先生「……私は鷺尾さん達を連れてくる。その間……青木さん！」

吾郎「……」

安芸先生「吾郎さん!!」

吾郎「……ッ！先生」

安芸先生「乃木さんを頼んでもいいでしょうか」

吾郎「！分かり……ました」

安芸先生「すみません……後はお願いします」

そう言つて園子を吾郎に任せて琴晴達の元へ向かう安芸先生。

安芸先生「何処……何処に……居た！」

と安芸先生が見つけた先には、倒れている琴晴と琴晴を介抱している須美と銀の姿が。

須美「青木さん！起きて青木さん！」

銀「何だよッ……何で起きないんだよ！」

安芸先生「二人共！」

須美 銀「先生！」

やつてくる先生に近づくと二人。

安芸先生「二人は大丈夫？」

須美「私達は大丈夫ですけれど……青木さんが……」

銀「琴晴がお役目を終わらせた後に突然倒れて、それから起きなくて……」

とこちらも耐えてはいるが今にでも泣き出しそうな二人

安芸先生「一体何が起きてるの……？とりあえず近くの病院まで琴晴さんを運びま

す。鷺尾さん、三ノ輪さんついてきて」

その言葉に頷く二人。そして先生は琴晴を抱えて車へと向かう。

吾郎「……！先生」

と公園の方から先生と抱き抱えられてる琴晴、それに二人の小学生が走ってきた。

安芸先生「吾郎さん、車で急ぎ近くの病院まで行けますか？」

吾郎「も、勿論です」

そう言い吾郎は車に乗り込む

安芸先生「急いで貴方達も乗って」

園子 銀 須美「……はい」

そう言い急いで乗り込む3人。それを見つつ琴晴と一緒に助手席に乗る先生。

吾郎「ここから近い病院は？」

安芸先生「……ここですね」

そう言つて手持ちのスマホを見せる安芸先生、

吾郎「……ここなら道も知ってるので、琴晴の事を見ていて貰ってもいいですか」

安芸先生「……分かりました」

そう言つて車を病院へと走らせる。

吾郎（……ッ！）

何もできなかつた自分に心の中で腹を立てながら。

琴晴「………?」

琴晴が目を覚ますとそこは暗闇が広がっていた。

琴晴「ここは?」

そう問いを出すのがそれに答える人はいない。だが良く目を凝らすと遠くの方に何人か、人が見える。

琴晴「人かな?話を聞きに……っ!」

琴晴の足は、まるでそこに縫い付けられたかのようにピクリとも動かない。

琴晴「何で足が……!」

すると周りが暗闇から見知つた景色に変わっていく。

琴晴「樹海……?」

そう、樹海であった。そして遠くには先程倒したはずの天秤がいた。

琴晴「何で？あいつはさっき倒したはず！」

そうして目の前の人達と戦い始める。最初は頭数の多い人側の方が有利だったが、天秤が回転し始めると途端に劣勢になっていく。

琴晴「何で！何で足が動かないの！」

そう言いながら足を動かそうとする琴晴。そんなことをしていると遠くの方で鈍い音が聞こえた、と思つたら近くでモノが落ちた音がした。そして琴晴がその方向を見ると、

琴晴「……！あ……あ……あああ！」

そこにあつたのは人であつた筈のモノだった。先程のバーテックスの攻撃で飛ばされてきたのだろう、腕や足はあらゆる方向に曲がつており使い物にならない事がわかる。身体も凹んでいたり骨が出ている部分もあつた。服も天秤の回転に巻き込まれてビリビリに破かれている。こんな状態になりながらも息は少しあり、神の力もそうだが人間が如何に頑丈なのかがわかる。

琴晴「動け……ッ！動いて………ッ!!私の足！」

そして、彼女は呟く様に、そして願う様に言った。

『生きたかった……』

しかしその願いは届かず、彼女の身体から力が抜けて……死んだ。目の前で、呆気なく。そして今まで動かなかった足が動くようになる。そのまま膝を曲げ顔を下にする
と、

琴晴「!……おえっ……」

と戻してしまつた琴晴。人がいきなり死んでしまう所を見てしまえば、琴晴の様な反応になるのは必然であつた。それが勇者だつたとしてもだ。そして少し時間が経ち、ようやく頭が冷静になり落ち着いてきた時、

「よお」

琴晴「誰?!」

と何処からか声が聞こえた。それと同時に樹海から元の暗闇に戻る。そして声の主に対して警戒をする琴晴。

「別に警戒はしなくてもいい。何もするつもりはないからな」

と琴晴に警戒を解く様に言う。しかし、

琴晴「それで警戒を解くと思う?」

と言つた。

「まあ、そりやそうだ。自分だつて同じ立場なら警戒するしな。ならそのまま聞け」

琴晴 「話を聞く前に……ここは何処？」

「ここか？ここは……まあ俺が作った精神世界みたいなものだ。そこにお前さんの……精神を持つてきた感じだ」

琴晴 「精神世界……？」

「そういうことだ。今お前さんの体は気絶して……多分ビョウイン？つて所にいるんじゃないか？」

琴晴 「……さっきのは」

「さっきのか？さっきのは……俺が作り出した幻影つてところか……といつても過去の時代で本当にあつたことだがな」

琴晴 「ならお前はバーテックスつて事か？」

「ん、違うかもしれないし違わないかもしれないな。まあでも、いつか嫌でもわかる様になるさ。それよりもだ」

とはぐらかしつつ話を進める謎の声

「さっきのを見てお前さんはどう思った？青木琴晴さんよ？」

と琴晴に問いかける。

琴晴 「……何で足が動かないのかと正直、自己嫌悪になつてる」

「幻影なのにか？あれはあくまでも映像……偽物だ。助けても意味はないぞ？」
と嘲笑した笑いを出す謎の声

琴晴 「だとしてもだ」

「ほおう……どうしてそう思った？」

琴晴 「自分は……勇者だから。手の届く限り、助けたい」

「勇者……勇者か……。ハッハハハ！」

と突然笑い出す謎の声。

琴晴 「何がおかしい！」

そう怒りを込めて言葉を返す琴晴。

「滑稽だから笑ったんだよ……ハハハ！」

琴晴 「……何だつて？」

「ハハハ……お前は確かに勇者なのだろうな。」

「誰かを守るために自分の身体を傷つけながら戦っていく。それも無条件で、何の対価も無しで。自分もそんな勇者と同じだと思っっているのだろうか？」

琴晴 「ええ、そうよ」

「いいや、違うね」

と言い切る謎の声。

琴晴 「な!？」

「お前は、まだ勇者ではない」

琴晴 「何を……言つて?」

「なんと言えばいいのか……まあ簡単に言えば、過去も含め勇者に選ばれた者達には持っているものを、お前は持つていない。という感じだな」

琴晴 「どういう……」

「まあ、少しは考えてみる……答えばかり出すのは楽しくないだろう?」

琴晴 「……ッ!」

琴晴は声のする方を睨む、かつて大赦の神官に向けてしたように。

「おお、怖い怖い。女子がそんな顔しちやダメだろう?……つと時間切れか。」

と飄々としながら謎の声は言った。

琴晴 「時間切れ……?どういうことだ!」

「落ち着け。この精神世界を保つにも制限時間があるつてことだ」

琴晴 「制限時間……」

「まあ、最初だったからな。不完全な所があつて短いんだよ」

「そんな訳じゃあな、また近いうちに会えるだろ」

琴晴 「近いうちつて……その前にお前は一体!」

と名を問おうとしたが、その前に琴晴の目の前が突然真っ白になった。

琴晴が目覚ますと白い天井が最初に目に入る。

琴晴（……………今は、夢？）

そうして身体を起こすと右から外の景色が見える。そして左を見るとドアがあり、ドアの向こう側では看護師であろう人達が忙しそうに働いている姿が目に入る。

琴晴「……………病院？」

琴晴は病院のベッドの上にあった。

琴晴「何でこんな所に……………」

そしてここに至るまでの記憶を思い出す。バーテックスを倒し、今回のお役目も無事に終わらせる事ができ安堵していると、突然頭の中で声が響き、頭痛が襲ってきた。そして気絶し謎の声と出会い、目が覚めたら病院のベッドの上にあった。

琴晴「こんなものかな……………」

そうして近くにあった自分のカバンからノートと筆記用具を出し、記憶をノートに書き記した。

琴晴「勇者……………か」

そう口にする。

琴晴「私に足りなくて他の皆が持っているもの……」

先程、謎の声に言われた事が胸に突っかかっている琴晴。筆記用具を置き考えるが、幾ら考えても分からない。気がつけば一時間たっていた。

琴晴「……駄目だ、さっぱり分からない」

そして寝つ転がる琴晴。そして真つ白な天井を見ていると、

☒「琴晴？」

琴晴「……おじさん」

ドアの方から声が聞こえ身体を起こす。そこにはおじさんこと……青木吾郎が居た。

吾郎「目え、覚ましたんか」

琴晴「今さつきね……」

吾郎「そっか……」

と荷物を置きベッドの近くにある椅子に座る吾郎。

吾郎「皆、心配してたで」

琴晴「……ごめん」

吾郎「儂よりか友人達に謝ってこい、彼女ら泣くほど心配してたで」

琴晴「……うん」

吾郎「……………」

琴晴「……………私が倒れてからのどのくらい時間が経ってるの？おじさん」

吾郎「琴晴が倒れてから……………3日ぐらいやな」

琴晴「3日……………」

吾郎「とりあえず今は休んどれ、まだまだ本調子じゃないじやろ？先生には儂から伝えとく」

琴晴「……………ありがとう、でも少しだけ起きてる」

吾郎「……………儂はこれから仕事に行かなければいかん、早く寝るんやぞ」

琴晴「うん……………いつてらっしやい」

そう言つて吾郎を送り出す琴晴。

吾郎「……………ごめんな」

琴晴「……………？今、何か言つた？」

吾郎「いや、何も言つてないで……………行つてくるわ」

そう言い病室から出る吾郎。

この後、次の日に安芸先生、須美、銀、そのつちが学校帰りにお見舞いに来てくれた。須美達3人が泣き出してしまった時は驚いてしまった。その後詳しい話を先生から

聞き謎の事の事を話した。がそういう事例は今までないらしく、大赦の方で議題に上げてみるらしい。その後先生からクラスの子達からのお見舞いの手紙や千羽鶴を渡された。クラスの人達の思い思いの言葉が手紙に綴られていて、皆に迷惑をかけてしまったなと思う琴晴であった。

捌ノ儀くがつしゆく

合宿、連携を高めるために行った物だったけれどとても有意義なものになった。

背中を預けあつた仲間と一緒に過ごつていうのは中々楽しいものだった。

ただ少し、甘えすぎてしまった……そう感じた。

そのせいで彼女に*****をさせてしまうことになってしまった。

ごめんなさい*****さん。

琴晴が学校に復歸して数日後、勇者一同は先生に呼ばれ空き教室に集まっていた。一人を除き……

銀「遅れましたああ！……ハアハア」

と扉を思いつきり開けて入ってきたのは、銀であった。

園子「あ！やつほくミノさん」

琴晴「お、ようやく来た。やつほー銀」

銀「やつほー園子に琴晴！……あれ、須美と安芸先生は？」

琴晴「先生は急遽入った職員会議に行ってるよ。須美さんは……」

須美「みくのくわくさくん……？」

銀「ひっ！」

と恐る恐る後ろを振り向く銀。そこには……修羅がいた。

須美「あれほど集合時間には遅れないようにと言っているのに……今回は先生の急用があつたから良いもの……」

園子「始まったね」

琴晴「始まったな」

とそんなやり取りをリラックスしながら聞いている、園子と琴晴。

銀「2人とも、見てないで助けてくれえ！」

園子「と言つても遅れてきたミノさんが悪いし〜」

琴晴「それに下手に助けるとこつちまで飛び火しそうだし……頑張れ！」

銀「そんな〜！」

と落ち込む銀。そんな中園子は、

園子「……平和だね〜」

銀「何処が!？」

と突つ込む銀、だがその行為は、

須美「三ノ輪さん！」

銀「ひゃい！」

須美「まだ話は終わってないわよ……？」

と須美さんの怒りを助長させてしまう要因になってしまった。

銀「ご、ご慈悲をー！」

安芸先生「遅れてごめんなさい……………え？」

と安芸先生が目にしたのは、教え子であり勇者の一人である鷲尾須美がその他の勇者達に説教しているところであつた。

安芸先生「……………何をしているのかしら……………？」

琴晴「安芸先生も来たしその辺で……………ね？」

須美「……………そうね、とりあえず今日の所はこの辺にしときましようか。でももし次もやつた時は……………三ノ輪さん？」

銀「わ、ワカリマシタ」

と釘を差される銀。

安芸先生「え、えーと……………大丈夫？話を始めても」

須美「はい、大丈夫です。お願いします」

と全員が席に着いたところで、須美さんの返事を合図に先生が話始める。因みに何かあつたのか説明すると、三ノ輪さんが怒られていてそこに園子と一緒に野次を飛ばしていたら……………と言う感じだ。

安芸先生「んんっ……それじゃ始めるわね、まずはこの映像を見てもらいたいのだけ
ど……」

と先生が取り出したのは小さい端末……まあスマホだ。そしてスマホに映っていたのは樹海に居る自分達の姿であった。初戦であったアクエリアス、次戦のライブラの映像を見せられ先生が口を開く。

安芸先生「……見てもらったら分かるのだけれど、連携は荒削りながらも良く出来ている……けどやっぱり所々危ない所があったりとまだまだな所が多い……そこで」

勇者達「「そこで？」」

安芸先生「合宿を行います」

琴晴「合宿……良く運動部とかがしている奴……」

とめんどくさがる琴晴。

銀「まためんどくさがってる……まあまあ、頑張り「勿論、勉強もしますよ三ノ輪さん？」嘘くん……」

と頂垂れる銀と琴晴。

安芸先生「神託によれば次の襲来はまだまだ先とされているので、次の連休を使い合宿を行います」

須美「はい！」

園子「はい〜」

銀 琴晴「はい……………」

安芸先生「それと、4人の中で指揮を取る隊長も決めておきましょうか……………乃木さん、頼めるかしら？」

園子「えっ！……………私ですか？」

銀「あたしは隊長とか柄じゃないし…………… 考えるのも苦手だしパスで！」

琴晴「どっちかかって言ったら銀は切り込み隊長だもんね〜、自分も似たような感じだから同じくパスで！」

安芸先生「鷺尾さんはどう？」

須美「私は……………私も乃木さんが隊長で賛成です」

園子「皆……………！わ、私で大丈夫かな……………」

銀「いざとなったら皆で助けるから大丈夫さ、な二人共！」

琴晴「せやでー」

須美「勿論よ」

園子「な、なら頑張ってみるんよ〜！」

そんなこんなで合宿日当日、銀は……遅れていた。

須美「……………」

園子「スピー……スピー……」

琴晴（修羅を超えた何かが居る……）

最早気迫で化身見たいなのを出している、須美さんとその横で寝ているそのうち、それを一個前の席から見ている私、という感じになっている。するとバスのドアが開き銀がそーつと覗いてくる。

須美「……ようやく来たのね三ノ輪さん？」

銀「ひっ！……遅れてしまい……申し訳！申し訳ございませんん！」

と側から見てもとつも無いスライディング土下座を決めた銀

須美「……ふう、ごめんなさい三ノ輪さん」

と須美さんの背後の修羅が消える。

銀「うえ!? な、何で須美が謝るんだ？」

と動揺する銀。

須美「私も少し緊張して、それが怒っているように見えたみたいで」

銀「そ、そうだったのか……それなら「でもね」ん？」

と再び修羅が見え始める。

須美「それとこれとは話が別なのよね……」

琴晴（あつ、あかん奴だ）

と説教が始まるかと思つた瞬間

安芸先生「出発するから早く座席に座りなさい」

と安芸先生の一言があり説教をすることもなくバスが走り始めた。

銀 琴晴（安芸先生、ナイス！）

と思う銀と琴晴なのであった。

因みにそのつちは合宿場所に着くまで起きなかったよ。

そして合宿場所に着き、荷物を下ろしお世話になる旅館の方々に挨拶を済ませ、勇者に着替え砂浜に移動してきた。そこからは大赦の全面バックアップが付く等の説明があり、強化合宿が始まる――

安芸先生「ほら、ドンドン行くわよー!」

銀「ちよつと待つて捌き切れnグヘエ!」

園子「あわわわ、これは少し多過ぎるよー!」

琴晴「加減をしてkアベシ!」

須美「これは少し多すぎなんじゃ……矢が一本じゃ捌き切れない!」

……どうやら地獄強化合宿になりそうだ。

そして合宿は続く。合宿では常に4人1組で動いた。1+1+1+1を3ではなく10……100にするためにだ。地獄の様な抜き（休憩はあり）に耐えたら、休憩と心を落ち着かせる為の座禅……休憩になつてない人もいたが、その後に勉強を行い、お

風呂、バランスの取れた食事そしてしっかりとした睡眠……

琴晴「うん、運動部の合宿だったね、完全に」

と最終日のお風呂で思う琴晴。

銀「だなあ……もつとこう勇者らしい……必殺技！って感じな技を覚えるイベントも無かったしなあ……ねえ須美さんや」

須美「仕方ないわ、今回は連携を主とした合宿だから……まあ必殺技なんて無いと思うけど」

銀「ちえ、夢がないなあ須美さんは……まあそれより」チラツ

須美 琴晴「？」

と琴晴と須美の二人を見る銀。

銀「ふつつつつ、今日が最終日、折角クラスの中のナンバー1とナンバー2が居るんだから拝んでおかねばな……」

須美「何の事？」

琴晴「……？あつ！」

と急いである場所を隠す琴晴、須美さんは分かっておらず無防備な状態。

銀「ふつつつつ、その胸に付いてるやつこさんですよ……まるで果物屋だ！親父その果物達をくれー！」

と須美さんに向かって嫌らしい手つきで近づき掴みかかる銀、
須美「ッ！三ノ輪さん！」

勿論抵抗し銀の手を掴み返す須美さん。

園子「皆々最後だしゆつくり浸かろうよ」

須美「ごめんなさい乃木さん！今はそれどころじゃ……」

銀「ッ！こつちはガードが硬いか……なら！」

と須美さんの手を離しこちらに目線を向ける銀

琴晴「うえっ!？」

銀「ひやつほうー！」

と須美さんと同じ感じで近づいてきた銀、しかし

琴晴「い い か げ ん に……」

銀「え？」

琴晴「しろおおお！」

銀「ふべえ！」

とカウンターを合わせる琴晴。

須美 園子「おお……」

それは綺麗に決まり銀は……

銀「……………」

温泉に浮いていた。

琴晴「いくら女性同士だからって恥ずかしいものは恥ずかしいの！反省してなさい

！」

銀「ボボボ……（はい……）」

そしてその様子を見ていて肌がつやつやになったそのつちなのでした。

銀「うー……いててて……」

園子「流石に今回ののはミノさんのせいだと思うな」

銀「それにしたってあんなに綺麗に入るとは」

琴晴「勇者だからね！」

須美「ええ……それで済ませるの……？」

今の状況は4人とも温泉から出てきてそれぞれのお布団の上に居る状態である。

銀「そんなことよりもだ！」
と立ち上がる銀。

園子「あわわ、いきなり動かないで〜ミノさん」

銀「ごめん」

と言いつ座る銀。

須美「そんなこと……?」

銀「最終日の夜、簡単に寝られると思ってるのかい?」

琴晴「余裕だね」

須美「寝れるわね」

園子「自分の枕持ってきたから簡単に寝れるよ〜」

銀「その枕の名前なんだっけ……?」

琴晴「んー……タコス!」

園子「違うよ〜サンチョなんよ〜」

銀「あー……そういえばそんな名前だったっけか……その洋服は?」

園子「鳥さん!焼き鳥好きなんよ〜」

銀「ああ、確かに美味しいもんね……」

琴晴「……お腹空いてきた」

須美 「さつきあんなに食べたのに……？」

琴晴 「空くときは空くもんさ」

須美 「駄目よ夜更かしなんて。言う事聞かない子には……夜中迎えにくるわよ……」

(お化け)

園子 「迎えにつ……!?!」(ゾンビ)

琴晴 「多分、二人共考えている事違つてる気がする」

銀 「そんなホラーじゃなくって……ほら好きな人の言いあいっことか!」

琴晴 「好きな人!」

須美 「み、三ノ輪さんはそういう人いるの……？」

銀 「んく……敢えて言うなら……」

琴晴 「居るんだ!」

園子 「おく!ワクワク……!」

銀 「弟!」

琴晴 「なーんだ……」

園子 「家族はずるいよ」

須美 「私もないからおあいこね」

銀 「ぐぬぬ……それなら琴晴は?」

琴晴「私もいないね」

園子「ふっふっふっ……私はいるよ〜！」

銀 琴晴「何!?!」

須美「本当に!?!」

銀「誰なんだ誰なんだ?」

園子「えつとね〜……わっしーとミノさんとはるはる〜！」

須美「はあ……そんなことだろうと思つたわ」

琴晴「まあそのつちだしねえ」

銀「こんなんの良いのだろうか、年頃の子の恋バナが……」

琴晴「まあ、勇者の恋バナなんてこんなもんさ、うん」

須美「そ、そうよ! 私達には神聖なお役目があるんだもの、恋なんて必要ないわ!」

と立ち上がる須美さん。

須美「明日も早いのだし寝ましょう! 消灯!」

と電気を消す。が消して少しすると星が暗くなつた部屋に照らし出される。

須美「ええ!?!」

銀「なんじゃこりゃ!?!」

園子「プラネタリウムなんよ、綺麗だから持つてきちゃつた」

須美「消しなさい！」

園子「は〜い……」

琴晴「あはは……」

須美「こんな時間まで起きてるなんて感心しませんよ？」

と後ろから声をかけられる。

琴晴「うん……？あぁ、須美さん……トイレに起きたら眠れなくなっちゃって」

須美「それで外を見てたんですか？……風邪ひきますよ」

琴晴「あはは……大丈夫、眠くなってきたから寝るよ」

と笑いながら返す琴晴。そしてすぐに須美さんに話しかける。

琴晴「……ねえ、須美さん」

いきなり呼ばれ驚きながらも、

須美「どうしたんですか青木さん？」

と返す。

琴晴「須美さんは戦つてて怖くない？」

須美「……どうしてそんな事を？」

琴晴「なんとなく」

少し考えつつ須美さんは話す。

須美「……怖いですよ、でもそれ以上にこの国を守るそんな気持ちが大きいです。」

と力強く答える。

琴晴「……そっか」

須美「私は先に寝ますね、早く寝るんですよ？」

琴晴「分かつてるよー」

と須美さんが床に入った所で一緒にその布団に入る琴晴。

須美「うえっ!?!青木さん」

琴晴「ごめん、今日だけこうさせて……」

と今まで話してきた中で一番か弱い声で話す琴晴。

須美「ええ、まあ大丈夫ですけど……」

琴晴「……ありがとう」

と横になって少しすると寝息が聞こえてくる。

須美「……早い」

とそんな琴晴の寝顔を見つつ思う。

須美「……いくら大人びていても、やはり同じ小学生なんですね……」

須美「怖くても、死ぬかもしれないと思いつつも笑顔を絶やさぬ貴方も……」
そう思いながら横になる。

須美「やれやれ……今日だけですからね……」

そうして琴晴は今までで一番ぐっすり寝れたそう。

……起きた時そのつちや銀にニヤニヤされたそうだが、そんな琴晴の寝起きの一言。
琴晴「わっしー布団はとんでもない……」

だったそうなの。